南遺跡発掘調査報告

三重県一志郡美杉村太郎生所在

２０００・３

三重県埋蔵文化財センター

序

美杉村太郎生は倶留尊山麓に広がる自然豊かな地域です。当地は古くから名張川水系の恵みを受けて文化が開けており、人びとの生活が営まれてきました。現在、史跡等も数多く、歴史的建造物も各地域に伝承されてきております。

三重県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財保護行政の一環として、公共事業予定地内の緊急発掘調査を数年来、実施してまいりました。県内で今年度実施された発掘調査は100件を越えています。

太郎生地区で行われる発掘調査では初回の調査となります。上太郎生バイパス敷設工事によって、削られる部分を事前調査によって、記録保存いたします。これら緊急発掘調査によって明らかになった埋蔵文化財は数多く、発掘調査を通して、郷土の文化遺産、埋蔵文化財を広く公開することこそ私たち県民一人ひとりの役割かと考えます。本報告が今後の埋蔵文化財行政の進展に役立つことを願って止みません。

平成12年３月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　大　井　與　生

例　　言

1　本書は、三重県一志郡美杉村太郎生に所在する南遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2　本調査は、平成11年度国補道路特殊改良事業に伴って実施し、調査費用は三重県教育委員会が三重県県土整備部から経費の執行委任を受けて実施した。

3　調査の体制は以下のとおりである。

調　査　主　体	三重県教育委員会
調　査　担　当	三重県埋蔵文化財センター
	調査第一課　　主事　　中川　明、宮田勝功
調　査　期　間	平成11年５月17日～平成11年９月21日

4　調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課、津地方県民局久居建設部、美杉村教育委員会、太郎生地域住民センター、および太郎生地区在住の方々に協力をいただいた。

5　発掘調査後の遺物整理は、上記担当者のほか、資料普及グループ職員が補助した。

6　本書の編集および遺物写真撮影は、中川、宮田が担当した。遺物実測およびトレースは資料普及グループ職員が補助した。文責は各文末に記した。

7　本書で示す方位は国土調査法の第 VI 座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。なお、磁北は 6°20′　西偏（平成６年10月）している。

8　本文及び表中で用いた遺構・遺物表示略記号は、下記の通りである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　Pit：柱穴、小穴

サ：サヌカイト製　　チャ：チャート製

9　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言（中川　明）…… 1
　　1　調査に至る契機 …… 1
　　2　調査の経過 …… 1
　　3　調査の方法について …… 1
　　4　文化財保護法に関する諸通知 …… 3
Ⅱ　位置と歴史的環境（宮田勝功）…… 3
　　1　位置と地形 …… 3
　　2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　基本的層序と遺構（中川　明）…… 7
　　1　層　　序 …… 7
　　2　遺　　構 …… 7
Ⅳ　遺　　物（中川　明）…… 15
Ⅴ　調査の成果（中川　明）…… 17

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　周辺地形図 …… 4
第３図　調査区配置図・地区割図 …… 6
第４図　遺構平面図 …… 9
第５図　土層断面図１ …… 11
第６図　土層断面図２ …… 12
第７図　土層断面図３ …… 13
第８図　ＳＢ65・66・67実測図 …… 14
第９図　出土遺物実測図１ …… 18
第10図　出土遺物実測図２ …… 19
第11図　出土遺物実測図３ …… 20

表　目　次

第１表　掘立柱建物一覧表 …… 14
第２表　出土遺物観察表１ …… 21
第３表　出土遺物観察表２ …… 22
第４表　出土遺物観察表３ …… 23
第５表　美杉村太郎生地区の遺跡 …… 24

図　版　目　次

ＰＬ１　南遺跡より倶留尊山を望む／調査区全景 …… 25
　　2　Ｃ地区全景／Ｂ地区の建物と土坑群 …… 26
　　3　ＳＢ63／ＳＢ62 …… 27
　　4　ＳＤ５／遺物出土状況 …… 28
　　5～8　出土遺物 …… 29～32

Ⅰ　前　　言

1　調査に至る契機

南遺跡は、一志郡美杉村太郎生字南に所在する面積6,000㎡の遺跡である。美杉村の遺跡番号が91の周知の遺跡である。

当埋蔵文化財センターでは、関係事業部局からの事業照会を受けて、平成10年10月に試掘調査を実施した。事業予定地内に設定した14箇所の試掘坑のうち５ヵ所から中世の遺物包含層を、２ヵ所から溝・土坑等の遺構を確認した。出土遺物は平安時代の瓦器、土師器である。このことから当地区内には中世の遺構の所在が明白となった。

このことをふまえて、県土整備部道路整備課および津地方県民局久居建設部と文化財保護の協議を重ねてきた。その結果、事業地内に調査区を設定し、滅失する部分2,700㎡について緊急発掘調査を実施することになった。

2　調査の経過

調査は、村道を挟み込んだＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区の計３区について実施した。調査期間は平成11年５月17日～同年９月21日の67日間である。

【調査日誌（抄）】

５月17日　重機による表土掘削開始（Ｃ地区）
５月20日　現場事務所設営。電気工事。一部包含層掘削実施。
５月21日　ケーブル線撤去のため重機掘削中断。
５月24日　発電機、ベルコン搬入。
５月25日　表土・包含層掘削続行。湧水処理。
５月26日　表土掘削続行（Ｂ地区）。道具搬入。
５月28日　作業員連絡。地区杭設定準備。
５月31日　Ａ地区排土置場設定が難航。３者協議。
６月１日　作業員開始。作業内容説明、諸連絡。排水溝掘削。
６月２日　Ｃ地区の人力による包含層掘削開始。遺構検出。縄文土器出土。
６月８日　重機による表土掘削終了。
６月14日　東壁土層断面図作成。土坑掘削。
６月15日　36列グリッドまで検出終了。
６月17日　サブトレンチ土層断面図作成。
６月23日　谷地形を掘削、検出。石器出土。
７月１日　中世の溝掘削。捏鉢、皿出土。
７月６日　谷地形の掘削完了。
７月８日　ローリングタワー設営。Ｃ地区写真撮影。
７月９日　調査員３名動員、平板測量実施。土層断面図作成。
７月12日　太郎生小学校６年児童現地見学、体験発掘実施。
７月21日　ベルコン延長。遺構カード整理。略測図整理、遺構プラン検討。
７月26日　Ｂ地区排水溝掘削。13、14列グリッドで総柱建物検出。
７月30日　攪乱土坑、ピット掘削。
８月４日　鋳造遺構の可能性あり。類例調査。
８月11日　排水管理。洗浄遺物の分類。
８月16日　土坑掘削続行。上段の遺構再検出。
８月19日　Ｂ地区土層断面図作成。
８月20日　Ａ地区包含層掘削開始。ＭＣＴＶ調査風景撮影。
８月24日　Ｂ地区遺構写真撮影。
８月26日　調査員３名動員、遺構実測図作成。
８月30日　スカイマスターによる写真撮影。地形測量。
９月１日　Ａ地区谷地形掘削。平板測量続行。
９月７日　作業員掘削終了。道具片付け。
９月９日　Ａ地区平板測量。コサック完了。
９月18日　発掘調査報告会実施、参加者80名。
10月21日　現地引き渡し終了。

3　調査の方法について

(1)　調査区の設定

本遺跡は、行政区域名称が美杉村太郎生字南・中尾・北垣内に所在する。南北に縦貫する道路予定地を現在の村道が横断するため、これをもとに便宜的にＡ～Ｃの３地区を設定した。

第１図　遺跡位置図（１：50,000）［国土地理院「倶留尊山・菅野」１：25,000による］

さらに道路予定地北側が緩くカーブを描くため、直線道路部分（B～C地区内）のセンターラインを利用し、東へ直角を振り込み、それらを基軸に４ｍ×４ｍのメッシュに区切って小地区を設定した。北から南に１～50の番号を、西から東へａ～ｋのアルファベットを与えた。これをグリッド名で呼称した。

なお、小地区設定は国土座標軸に基づかない。

⑵　遺構図面について

各調査区の平面図は縮尺 1/100で作成し、掘立柱建物周辺は1/20を作成した。土層断面図は1/20と一部1/10を作成した。個別の遺構実測図は、1/20の縮尺を用いた。

⑶　掘削について

掘削は、表土・旧耕作土（一部包含層）を重機で行い、以下、遺構面までを人力で実施した。

なお、調査期間中補助していただいたのは、太郎生地区在住の方々である。記して感謝いたします。

（敬称略、順不同）

今井大各、日置勝夫、田中月生、浅井　静、岡田正一、井上和寿、高城光男、日置　登、池村　修、田中吉男、岡田正彦、国原　基、国嶋泰彦、今井ツギ、田中すえ子、井上米子、蒲原きみ子、服部ナミヱ、金子順子、久保さわゑ、中林百合子、米川啓子横川ミヨ子、岡田たか子、中林玉子、中原つた子、今井ふゆみ。以上

4　文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により各宛先に送付している。

- 法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
  平成11年５月10日付道整第69号（県知事通知）
- 法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
  平成11年５月20日付教生第332号（県教育長通知）
- 遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
  平成11年10月18日付教埋第4-26号（県教育長通知）

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　位置と地形

南遺跡⑴は、一志郡美杉村太郎生字南、中尾、北垣内に所在する。遺跡が位置する太郎生地区は、地形的には東に大洞山（985m）や尼ヶ岳（957m）、西には倶留尊山（1037.6m）や国見山（883m）を主峰とする第三紀鮮新世に噴出したとされる室生火山群が連なる。この山地の間を開析して名張川が北流し、両岸には河岸段丘を形成する。標高は約423～426m程、現況は水田である。

平成６・７年に美杉村教育委員会によって実施された村内の詳細分布調査により、太郎生地区でも多くの遺跡が確認された[①]。本遺跡もこの調査によって発見された遺跡である。

以下、周辺の遺跡を時代順に概略記述する。

2　歴史的環境

縄文時代

太郎生地区の境ヶ瀬Ｂ遺跡⑵や八知地区の大洞山総合遺跡⑶で押型文土器が採集され、早期まで生活の跡が辿れると考えられる。また、山之田遺跡⑷や岩山遺跡⑸でスクレイパーが、立道遺跡⑹で石匙が、太郎生登り遺跡⑺や下切遺跡⑻などでサヌカイト製石鏃が採集されている。遺構や土器が確認された遺跡としては、八手俣川流域の下之川富田遺跡が知られ、中期末から後期の土器が出土している[②]。後期には、上多気地区の土井沖遺跡で竪穴住居と土坑が見つかり[③]、この時期の集落の性格が明らかになった。また、下之川富田遺跡では自然流路から晩期の条痕文土器も出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、太郎生地区では現在のところ不明である。下之川富田遺跡で前期前半の遠賀川式土器が自然流路から確認されている。また昭和47年のダム建設によって消滅した君ヶ野遺跡で中期の土器が発見されている[④]。上多気地区の土井沖遺跡で中期の溝等が検出され、中期中葉を中心とした土器が出土している。八知地区の東川遺跡でも中期前半の土器が出土している[⑤]。

古墳時代

太郎生地区ではまとば遺跡(9)で須恵器片が採取されているにとどまる。また太郎生地区出土とされる三角縁神獣鏡があり、古墳時代のこの地域の重要性が述べられている[6]。南小学校の造成に伴って調査された奥津地区の西ノ手遺跡では、中期の竪穴住居が２棟確認されている[7]。大洞山総合遺跡でも須恵器片が採取されている。古墳としては、八手俣川流域で７世紀前葉頃とされる横穴式石室の下之川古墳(15)が確認されている[8]。

飛鳥時代～平安時代

雲出川本流域の東川遺跡から奈良時代の竪穴住居が、八手俣川流域の下之川富田遺跡で飛鳥から奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物が見つかっている。

平安時代から鎌倉時代には、太郎生地区の包蔵地遺跡のほとんどから多数の瓦器片が表採されており、この時期の可能性が推察される。確認された遺跡としては、西ノ手遺跡でこの時期の掘立柱建物群が井戸をともなって検出されている。東川遺跡からは平安時代と鎌倉時代の掘立柱建物が検出され、各地域に集落が分布している。下之川富田遺跡で平安時代前期の土器が数多く出土しており、人びとの暮らしが明らかになってきた。

文献から当地域の歴史を辿ってみたい。律令時代には、太郎生は伊賀国名張郡に属しており、承平四年（934）十二月十九日付の「伊賀国夏見郷刀禰案」の伊勢大神宮所領の四至を注進した地名に「太良牟」とあり、平安時代初頭には太郎生の名が見られる[9]。またこの四至から太郎生から北の名張川中流域、南と西に隣接する奈良県宇陀郡の山地をふくめた地が神宮領として支配されていたと考えられる。建久三年（1192）八月の神領注文にも「多良牟六箇山二宮御領」と記載されている[10]。六箇山から神宮への貢納には、『神鳳鈔』に「御饌調備料箕藤葛并参度御参祭御贄等雑器料正目檜、此外位苧麻布紙等勧之」とあり[11]、箕や藤づる、三節祭の御贄のして雑器料として

第２図　周辺地形図（１：5,000）

柾目の檜・苧麻布・紙といった産物を貢納していた。また、この地が神領化した起源については、延暦23年（804）に同様の貢納の記事が見え、「伊賀国造遠祖奉地」とある[12]ことから飛鳥・奈良時代に遡ることも考えられる。

平安時代末期には、天仁元年（1108）に興福寺末寺の伝法院領[13]と天承２年（1132）に東大寺領黒田荘[14]との間で境界相論が起こっている。また、末期には平氏の勢力下にあり、平頼盛の所領であった。頼盛は、その母池禅尼が平治の乱で源頼朝を助命したことから、平氏西走の後も京都に残り頼朝の保護を受け、寿永三年（1184）四月五日条では、頼盛と池禅尼の領地は平家没官領とならず、安堵されている[15]。また平氏滅亡後20年を経てもなお平氏の残存兵力によって六箇山に城郭を築いて源氏と戦ったという記事があり、元久元年（1204）５月に敗退している[16]。また平維盛の子六代が落ち延びたという伝説が伝えられ、日神の仲善寺⑽に、その墓と言う五輪塔ものこるが、その五輪塔の年代は下る。

鎌倉時代以降

また、中太郎生の国津神社⑾には日神の山王権現合祀の際に石造十三重塔と阿弥陀三尊種子石碑が移建された。この国指定の重要文化財である石造十三重塔は、鎌倉時代後期の作とされる。仲善寺には、阿弥陀如来像を中心とする石室があるが、延命地蔵菩薩、合掌地蔵は鎌倉時代末期の作と伝えられる。

南北朝以降も太郎生は、神宮領として統括されている[17]。多気には北畠氏が居館を構え、南伊勢一帯がその支配下におかれる。

太郎生地区の中世城館としては、中太郎生の字城山に北畠氏家臣で中森数馬之助の居城であったとされる中森城跡⑿[18]がある。また名張川下流の日神には安藤帯刀の居館と伝えられる日神城跡⒀がある[19]が、居館跡というより見張り台と考えられる。

近世には、慶長13年（1603）に津藩領となる。慶長18年（1613）に六箇山地域六箇村の名がみえ、これらは年預衆の定めによって祭事を行っている[20]。

明治４年（1871）に度会県、明治９年（1880）に三重県の管轄となる。同年の伊勢暴動では、土地鑑定人をはじめ８件が焼かれたり被害をうけている。明治22年（1889）に町村制施行により当地は太郎生村となる。昭和30年（1955）には、太郎生村ほか６か村が合併して現在の美杉村にいたる。

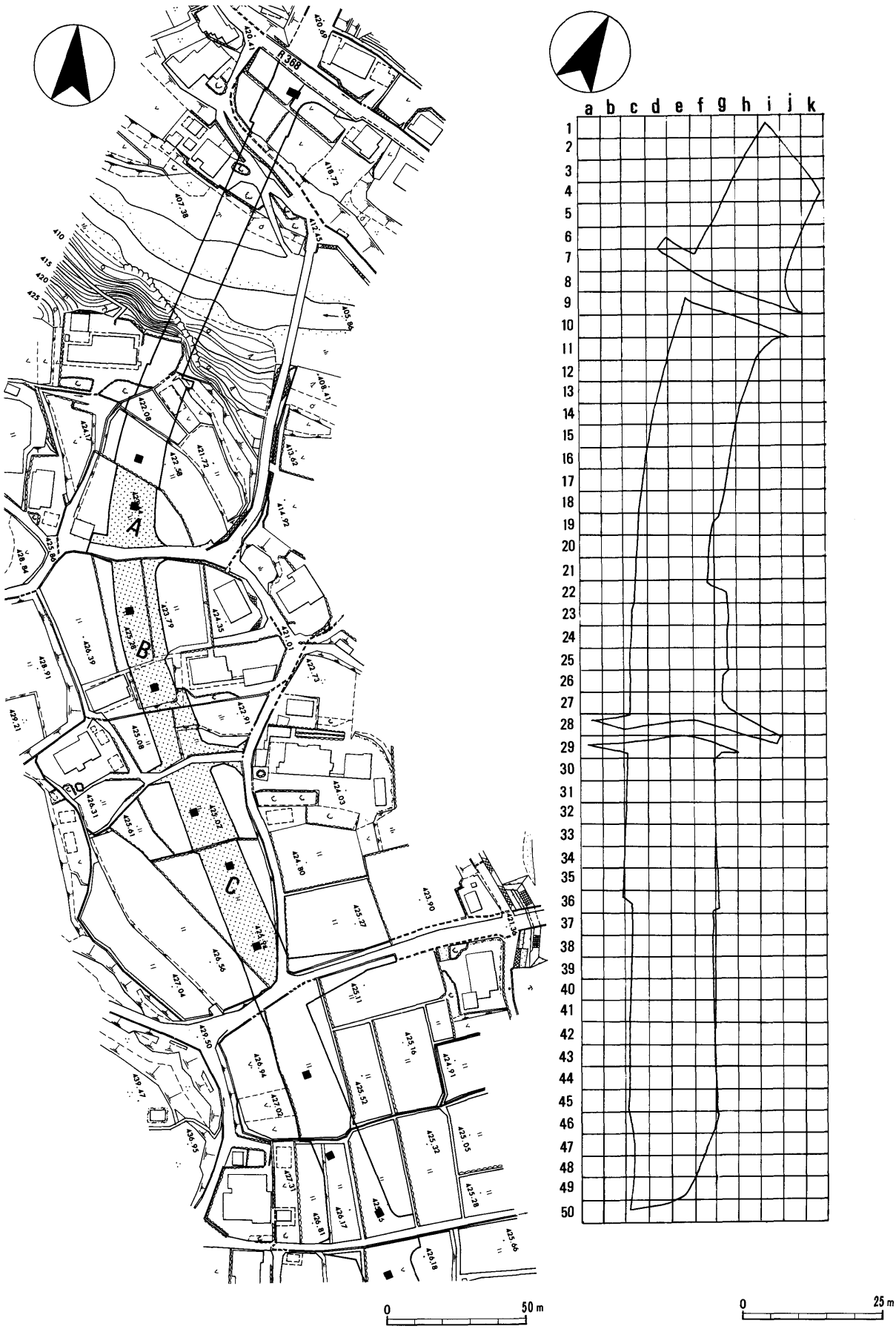
（宮田勝功）

【註】

①皇學館大学考古学研究会編『美杉村の歴史』1995
②伊藤裕偉『下之川富田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1998
③伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993
④『美杉村史』上巻、美杉村教育委員会　1981
⑤竹田憲治ほか「東川遺跡」『六地蔵Ａ遺跡・六地蔵Ｂ遺跡・高塚宅跡・東川遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994
⑥伊勢野久好「旧一志郡内の首長墓」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991
⑦「平成10年度年報」三重県埋蔵文化財センター　1999
⑧稲生進一『下之川古墳（石室跡）』美杉村教育委員会　1985
⑨光明寺文書、承平四年条『平安遺文』第１巻
⑩神宮雑書、建久三年条『鎌倉遺文』第２巻
⑪神鳳抄『群書類聚』第一輯
⑫『皇太神宮儀式帳』巻第一、延暦二三条「伊賀国造遠祖奉地」
⑬増補史料大成刊行会編、天仁元年条、『増補史料大成』第11巻（中右記三）　臨川書店　1988
⑭東大寺文書、天承二年条『平安遺文』第５巻
⑮黒板勝美編、寿永三年条『新訂増補国史体系』第32巻（吾妻鏡）吉川弘文館　1935
⑯前掲註⑮
⑰大永六年および天文五年の庁宣注文は、神宮古典籍刊『神宮神領記』（昭和58年刊）による。尚、享徳元年の庁宣注文は、県史編纂室小林　秀氏のご教示による。原文書は神宮文庫に保管されている。
⑱『三重の中世城館』三重県教育委員会　1977
⑲前掲註⑱
⑳慶長十八年三月六日条「六箇山年預衆定」『三国地誌』

【参考文献】

●平松令三監修『三重県の地名　日本歴史地名体系24』平凡社　1984



第３図　調査区配置図（１：2,000）・地区割図（１：1,000）

Ⅲ　基本的層序と遺構

1　層　　序

調査区は、狭隘な低位段丘上に位置しており、東側を流れる名張川に向かって段丘面は２面形成されている。標高は平均425mで比高差は２ｍである。

Ａ～Ｃ地区にかけて、南西方向からの谷地形が形成され、それに伴う流路を検出した。埋土は、平坦面の褐色土とは異なり、黒褐色系である。平坦面では、地表面下0.5～0.6mで、黄褐色系の基盤層を確認できた。しかし、Ａ地区の地表面下60cm以下では削平が著しいためか、明瞭な基盤層は確認できていない。

以下、Ａ・Ｂ・Ｃ地区の基本的な層序を順に記述する。

(1)　Ａ地区の層序

第１層：茶褐色土（耕作土）

第２層：橙灰色土（床土）

第３層：灰色粘質土（旧耕作土）

第４層：褐灰色砂質土（第Ⅰ包含層）

第５層：明褐色砂質土（第Ⅱ包含層）

第６層：黒褐色砂質土

第７層：褐灰色砂質土

(2)　Ｂ地区の層序

第１層：灰色粘質土（耕作土）

第２層：橙色粘質土（床土）

第３層：黄褐色粘質土（基盤層）

(3)　Ｃ地区の層序

第１層：暗灰色砂質土（耕作土）

第２層：橙色粘質土（床土）

第３層：褐色砂質土（包含層）

第４層：黄褐色粘質土（基盤層）

2　遺　　構

今回の調査では、おもに鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物、溝および近世の土坑を確認した。Ａ地区から順に以下、記述する。

(1)　Ａ地区

【土坑】

ＳＫ61　ｊ列５グリッドで検出した。長軸1.8m、短軸0.8m、深さ0.6mである。出土した土師器小片から室町時代後半の遺構である。

ＳＫ47　ｇ列７グリッドで検出した攪乱土坑である。長軸5.5m、短軸4.1m、深さ0.2mである。唐津焼等の近世初頭の遺物が出土している。

【溝】

ＳＤ48　ｉ列６～７グリッドで検出した。長さ4.3m、幅0.3m、深さ0.2mである。後世の削平が激しく全体形は不明であるが、南に延長する遺構である。遺物が小片で時期決定は欠くがおそらくＳＫ61と同時期の遺構である。

(2)　Ｂ地区

【掘立柱建物】

ＳＢ63　ｉ列25～26グリッドで検出した。桁行２間×梁行１間以上の建物と想定される。棟方向はN°15Eである。柱間寸法は７尺の等間である。南北棟で東半分が調査区外に広がる。段丘がかなり削平されていたが、柱穴の遺存状況は良好で掘形径は0.3mである。

ＳＢ65（図８）　ｄ～ｆ列12～15グリッドで検出した。桁行４間×梁行３間の総柱建物である。棟方向はN2°Eで、柱間寸法は７尺の等間である。掘形径は0.3～0.4mである。西面の柱列の埋土から共通して炭化物を検出した。これら柱痕跡から根石が出土した。少量ながらＳＢ67と同時期の土師器が出土している。

ＳＢ67（図８）　ＳＢ65の北側のｇ列10～11グリッドで検出した。調査区の制約から桁行３間×梁行１間以上の建物と想定される。棟方向はN6°Wである。検出面が軟弱で不明瞭であったが、掘形径は先述の建物に比較するとやや大きく、0.3mを測る。

ＳＢ66（図８）　ＳＢ67の南側、ｅ列９～10グリッドで検出した。調査区の制約から桁行２間×梁行１間以上の建物と想定される。棟方向はN11°Wである。基盤層に小礫が混入しており、土坑との重複関係がつかめない箇所があった。掘形径は0.5mである。

【土坑】

ＳＫ14　ｃ列21グリッドで検出した。径1.2m、深さ0.15mで円形である。瓦器、土師器鍋が出土している。建物に伴わない単独遺構である。

ＳＫ15　ｅ列21グリッドで検出した。径1.1m、深さ0.74mで、平面形は円形である。ＳＫ14と同形状であり、壁面が底部へ下がるほど開いている。埋土は褐色系の単層で堆積していたため、短期間に埋没したとみられ、ＳＫ14と同様、単独の遺構であると考えられる。

ＳＫ25　ｅ列14グリッドで検出した。径1.2m、深さ0.3mでほぼ円形である。瓦器が少量出土した。中世後半の遺構であるとみられる。

ＳＫ33　ｄ～ｅ列16グリッドで検出した。径1.1m、深さ0.3mでほぼ円形である。暗灰褐色系の埋土から常滑焼と灯明皿、土師器鍋が出土した。ＳＫ25と同様中世後半の遺構であるとみられる。

ＳＫ36　ｆ列15グリッドで検出した。長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.35mで円形である。出土した菊皿(11)から江戸時代中期の遺構であるとみられる。

ＳＫ38　ｆ～ｇ列14～15グリッドで検出した。長軸3.0m、短軸2.8m、深さ0.55mで、ＳＫ42に連続する不定形な円形である。断定はできないが、出土した陶器小片から時期的には中世の後葉と考えられる。

ＳＫ40　ｆ～ｇ列13～14グリッドで検出した。長軸4.6m、短軸2.7m、深さ0.57mである。瓦器、土師器鍋小片と陶器が出土している。時期的には中世～近世まで存続した遺構とみられる。

ＳＫ42（図６）　ｇ列13～14グリッドで検出した。長軸8.0m、短軸2.3m、深さ1.26mで調査区内で最も大規模な遺構となる。東半分は調査区外に広がる。底部から信楽焼（16）、灯明皿（13）、土師器鍋（14）、瓦器が多量に出土した。時期的にはＳＫ40と同様と考えられる。

ＳＫ50　ｇ～ｈ列12グリッドで検出した。長軸2.0m、短軸1.8m、深さ0.43mである。
常滑焼擂鉢（23）、火ばさみ（24）が出土している。

ＳＫ51　ｇ列11グリッドで検出した。長軸3.2m、短軸1.8m、深さ1.49mである。東半分は調査区外へ広がる。常滑焼擂鉢（27）が出土している。時期的には中世～近世初頭と存続期間が長い遺構である。

ＳＫ52　ｈ列11～12グリッドで検出した。長軸2.1m、短軸2.0m、深さ0.25mである。常滑焼甕・擂鉢と併せて炭化物が多量に出土している。遺構上面出土の土師器皿や瓦器は混入品とみられる。

【溝】

ＳＤ９　ｅ列26グリッドで検出した。幅1.2m、長さ5.9m、深さ0.19mで北流する。西側の段丘との比高差2.5mであり、荒地であったので検出が困難であった。埋土から常滑焼、瓦器椀、土師器鍋が出土している。これらから時期的には、鎌倉時代初頭頃と考えられる。

ＳＤ10　ｅ列26グリッドで検出した。幅0.3m、長さ5.4m、深さ0.11mで北流する。ＳＤ９とともにかつての谷筋に沿って北流する遺構である。瀬戸焼小片と銭貨（８）が出土している。

ＳＤ11　ｅ列25グリッドで検出した。幅1.0m、長さ1.8m、深さ0.25mで北流する。山茶椀、捏鉢（９）が出土している。時期的には室町時代の遺構である。

ＳＤ12　ｃ～ｄ列27グリッドで検出した。幅1.　m、長さ2.5m、深さ0.2mで北方へ流れる。上面でチャート、サヌカイト製剥片を確認したが、時期的には瓦器の時期であると考えられる。鉄製品も１点出土している。

⑶　Ｃ地区

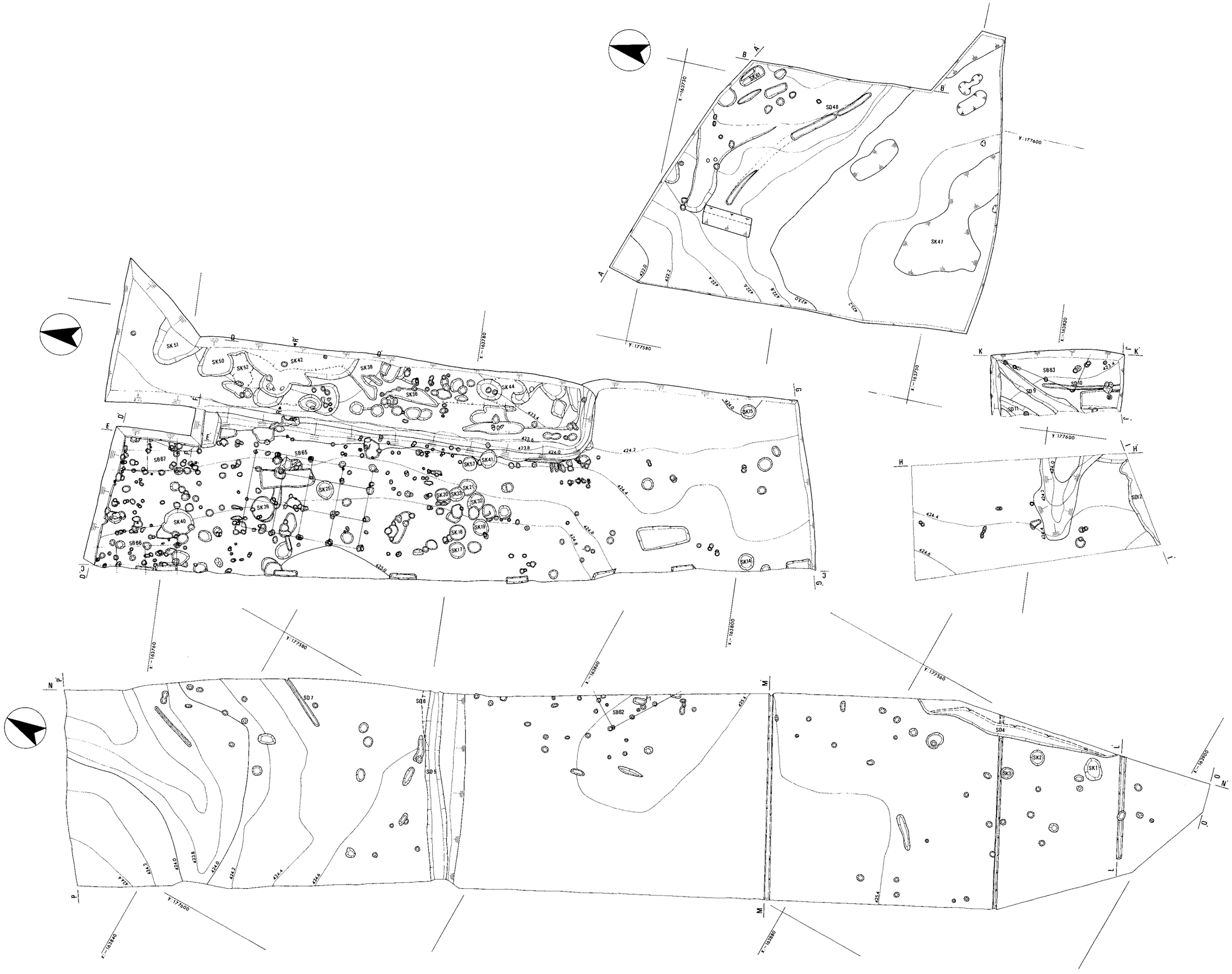
【掘立柱建物】

ＳＢ62　ｅ～ｆ列38～39グリッドで検出した。調査区が制約されるため、東半分が調査区外へ広がる。断定はできないが、桁行３間×梁行２間以上の南北棟と想定される。柱間寸法は６尺の等間である。棟方向がＥ14°Ｓである。柱掘形から瓦器小片が出土している。鎌倉時代前葉期の遺構であると考えられる。

【土坑】

ＳＫ１　ｅ列47列グリッドで検出した。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.45mで平面形は円形を呈する。壁面は垂直に掘削されている。暗褐色の埋土から土師器杯と瓦器椀（１）が出土した。遺構上面でチャート製剥片や焼石も出土したが、これは埋没時の混入と考えられる。時期的には平安時代後期末と考えられる。

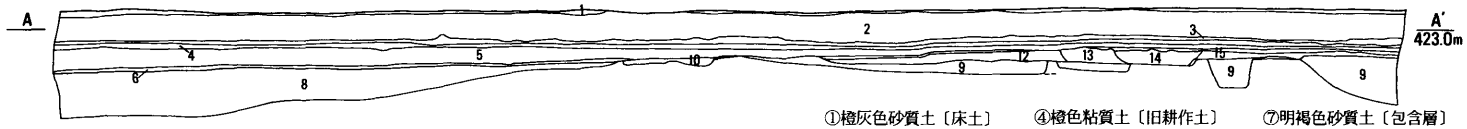
ＳＫ２　ｅ列46グリッドで検出した。長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.64mである。埋土中に炭化物が多量に混入していた。単層であることから短期間に埋没



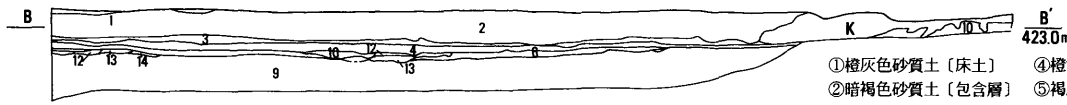
第４図　遺構平面図（１：250）

第5図　土層断面図1（1：100）

A地区

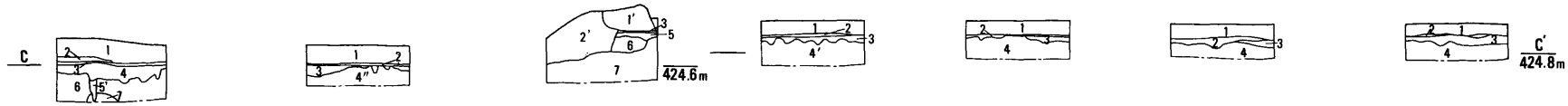


①橙灰色砂質土〔床土〕
②暗褐色砂質土〔包含層〕
③灰色粘質土〔旧耕作土〕
④橙色粘質土〔旧耕作土〕
⑤褐灰色砂質土〔包含層〕
⑥明橙灰色粘質土〔旧床土〕
⑦明褐色砂質土〔包含層〕
⑧黒灰色粘質土〔包含層〕
⑨黒褐色砂質土
⑩褐灰色砂質土（黄褐色粘質土混入）
⑪　⑥に同じ　〔SD埋土〕
⑫明褐灰色砂質土
⑬灰褐色砂質土〔SD埋土〕
⑭明灰褐色砂質土〔SD埋土〕
⑮　⑫に同じ

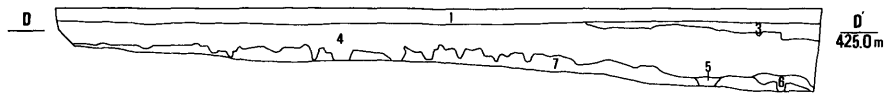


①橙灰色砂質土〔床土〕
②暗褐色砂質土〔包含層〕
③灰色粘質土〔旧耕作土〕
④橙色粘質土〔旧耕作土〕
⑤褐灰色砂質土〔包含層〕
⑥明橙灰色粘質土〔旧床土〕
⑦明褐色砂質土〔包含層〕
⑧黒灰色粘質土〔包含層〕
⑨黒褐色砂質土
⑩褐灰色砂質土（黄褐色粘質土混入）
⑪　⑥に同じ　〔SK埋土〕
⑫明褐灰色砂質土
⑬灰褐色砂質土〔SD埋土〕
⑭明灰褐色砂質土〔SD埋土〕K：攪乱

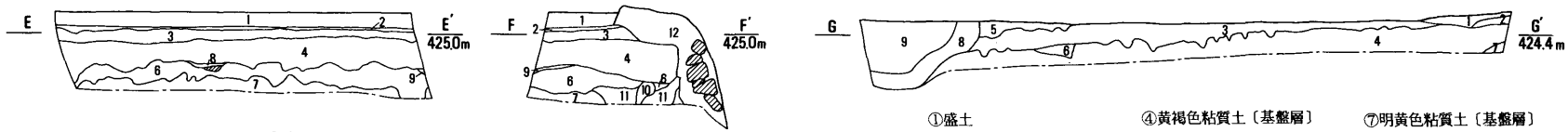
B地区



①灰色粘質土〔耕作土〕
①′灰褐色砂質土（畦畔）
②明灰色砂質土〔旧耕作土〕
②′褐色砂質土
③橙色粘質土〔床土〕
④黄褐色粘質土〔基盤層〕
④′明黄褐色砂質土
④″灰白色砂質土
⑤黄褐色粘質土（マンガン粒混入）〔基盤層〕
⑤′暗黄褐色砂質土
⑥黄褐色粘質土〔基盤層〕
⑦明黄白色粘質土〔基盤層〕

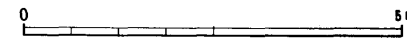


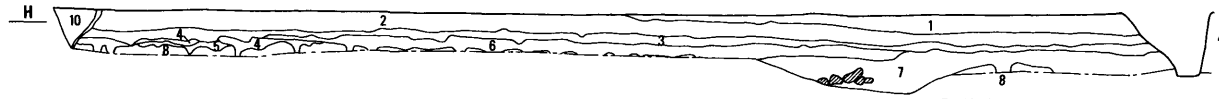
①暗灰色粘質土〔耕作土〕
②橙色粘質土（砂粒混入）〔床土〕
③灰褐色砂質土（黄褐色粘質土混入）〔包含層〕
④暗褐色砂質土（炭化物混入）〔包含層〕
⑤褐色砂質土（灰色粘質土混入）
⑥褐色砂質土〔包含層〕
⑦黄褐色粘質土〔基盤層〕



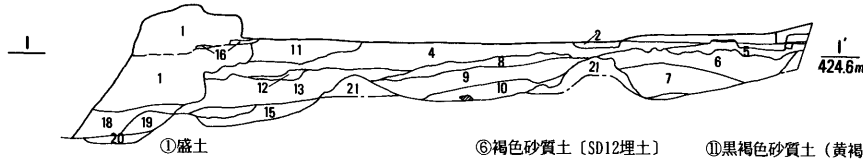
⑧焼土・炭化物層
⑨炭化物層
⑪　④に同じ　〔Pit 埋土〕
⑫淡褐色砂質土〔堤〕

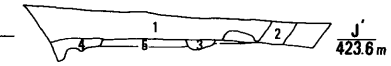
①盛土
②灰色粘質土〔耕作土〕
③褐色砂質土〔構埋土〕
④黄褐色粘質土〔基盤層〕
⑤④と⑥の混入
⑥黒褐色砂質土〔包含層〕
⑦明黄色粘質土〔基盤層〕
⑧灰白色砂質土〔整地土〕
⑨黒色砂質土





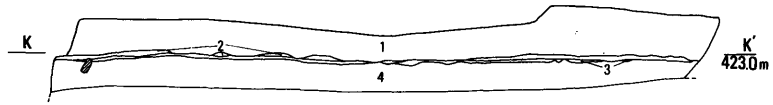
①黒褐色砂質土（黄褐色粘質土混入）
②暗褐色砂質土（炭化物混入）
③明褐色砂質土
④黒褐色砂質土
⑤暗黄褐色砂質土
⑥淡褐色砂質土〔包含層〕
⑦褐色砂質土〔谷及びSD11埋土〕
⑧黄褐色粘質土〔基盤層〕
⑨灰白色砂質土〔整地土〕
⑩黒色砂質土〔整地土〕





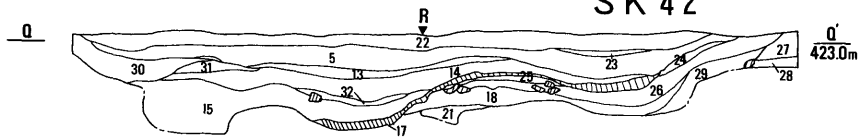
①盛土
②灰色粘質土〔耕作土〕
③橙色粘質土〔床土〕
④暗褐色砂質土（炭化物混入）〔包含層〕
⑤褐色砂質土（炭化物混入）〔包含層〕
⑥褐色砂質土〔SD12埋土〕
⑦明褐色砂質土〔SD12埋土〕
⑧　⑥に同じ〔SD12埋土〕
⑨　⑦に同じ〔SD12埋土〕
⑩褐色砂礫層〔SD12埋土〕
⑪黒褐色砂質土（黄褐色粘質土混入）
⑫明褐色砂質土
⑬褐色砂質土（炭化物混入）
⑭淡褐色砂質土〔SD11埋土〕
⑮褐色砂質土〔SD11埋土〕
⑯黄褐色粘質土〔床土〕
⑰暗褐色砂質土
⑱暗灰色粘質土〔耕作土〕
⑲黄褐色粘質土（灰色粘質土混入）
⑳　⑩に同じ〔SD 9埋土〕

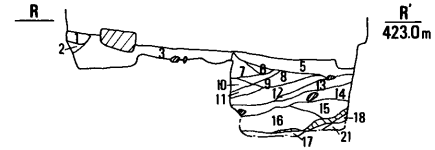
①暗灰色粘質土〔耕作土〕
②灰色粘質土〔旧耕作土〕
③淡黒灰色砂質土〔SD10埋土〕
④暗灰褐色砂質土〔攪乱〕
⑤黄褐色粘質土〔基盤層〕



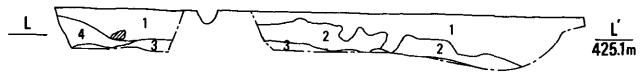
①暗灰色粘質土〔耕作土〕
②灰色粘質土〔旧耕作土〕
③黄橙色砂質土〔床土〕
④暗灰褐色砂質土〔攪乱〕
⑤黄褐色粘質土〔基盤層〕

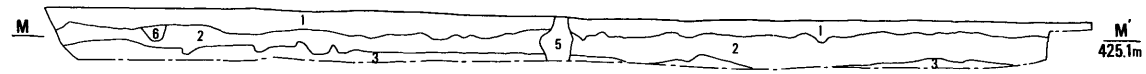
SK 42





①褐色砂質土
②黄褐色粘質土
③褐色砂質土（黄褐色粘質土混入）
④炭化物
⑤褐色砂質土
⑥明褐色砂質土
⑦黄褐色砂質土（明褐色砂質土混入）
⑧褐色砂質土（黄褐色砂質土混入）
⑨　⑥に同じ
⑩黄褐色粘質土（褐色砂質土混入）
⑪暗褐色砂質土
⑫黒褐色砂質土（黄褐色粘質土混入）
⑬　⑪に同じ（炭化物含む）
⑭　⑪に同じ（炭化物多量）
⑮暗褐色砂質土
⑯暗褐色砂質土（明褐色砂質土混入）
⑰黒灰色粘質土（焼土・炭化物含む）
⑱暗褐色砂質土（黄褐色粘質土混入）
⑲　⑱に同じ
⑳　⑰に同じ
㉑黄褐色粘質土（暗褐色砂質土混入）
㉒褐色砂質土
㉓黄褐色粘質土（ブロック状）
㉔焼土ブロック
㉕　⑱に同じ
㉖　⑮に同じ
㉗暗褐色砂質土
㉘　⑱に同じ
㉙黄褐色粘質土
㉚　㉗に同じ
㉛　㉘に同じ
㉜　明黒灰色粘質土（焼土・炭化物含む）

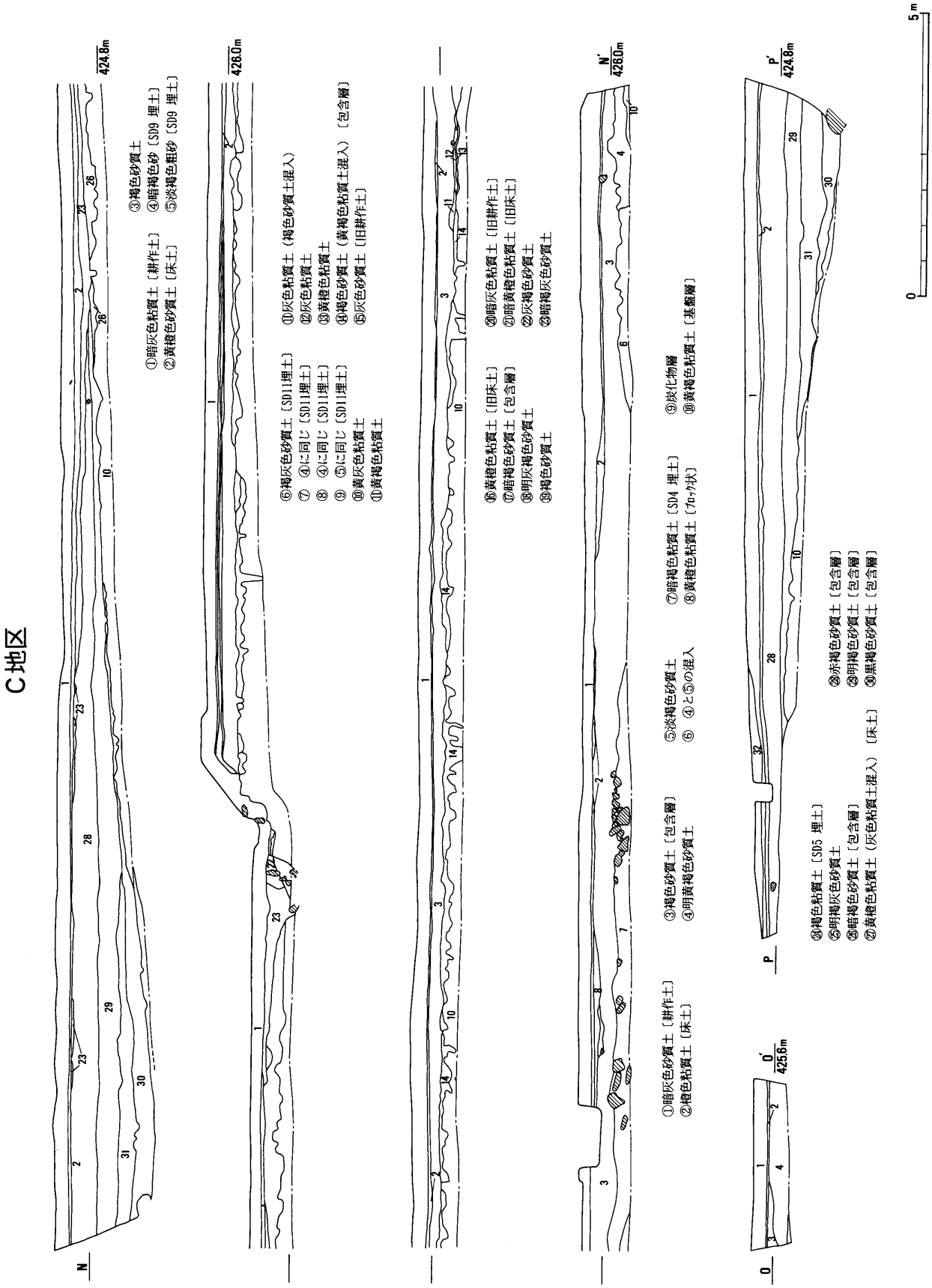




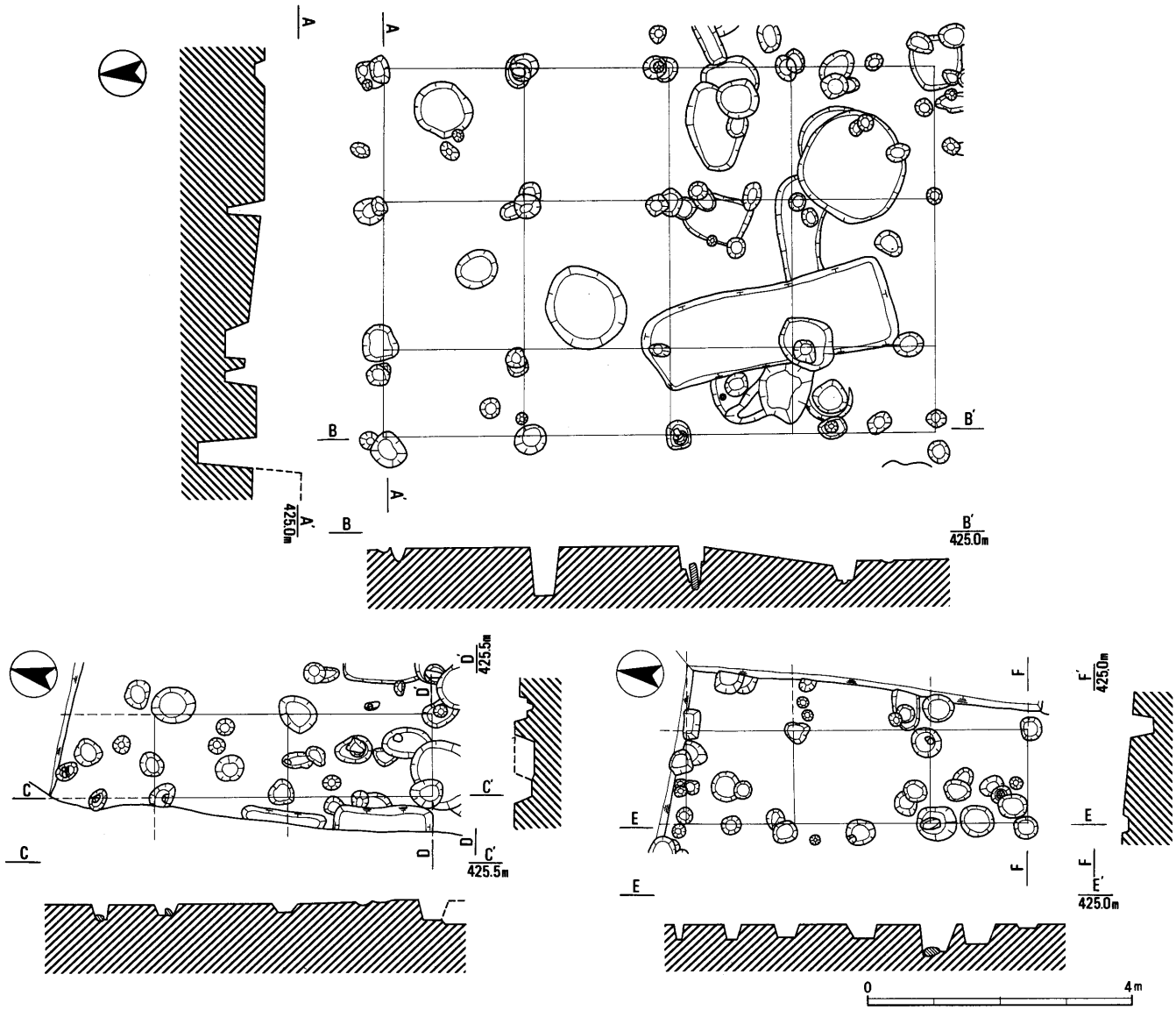
①暗黄褐色砂質土
②淡褐色砂質土
③黄褐色砂質土〔基盤層〕
④黄褐色砂質土（淡褐色砂質土混入）
⑤攪乱
⑥淡黄褐色砂質土

0　5m

第6図　土層断面図2（1：100）



第７図　土層断面図３（１：100）



第８図　ＳＢ65・66・67実測図（１：100）

番号	規模(間)	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		
ＳＢ62	３×２以上	E14° S	3.6以上	2.1以上	1.7+1.8+1.2→	2.1+0.4→	鎌倉初頭	南北棟の可能性あり
ＳＢ63	２×１以上	N15° E	4.4以上	2.1以上	2.1+2.4+1.2→	2.2+0.3→	室町時代	東西棟の可能性あり
ＳＢ64	２×２以上	N20° E	6.1以上	4.2以上	2.7+3.0+0.7→	2.1+2.1+0.9	鎌倉時代？	検出が不明瞭
ＳＢ65	４×３	N２° E	9.0	5.8	2.1+2.1+2.2+2.1	1.2+2.1+2.1	室町時代	南面の柱穴に炭化物が混入、根石を伴う
ＳＢ66	２×１以上	N11° W	4.0以上	1.3以上	2.2+1.8→	1.3+？	室町時代	検出面の基盤に小礫混入、柱痕不明瞭
ＳＢ67	３×１以上	N６° W	5.2	1.4以上	1.4+2.2+1.6	1.4+？	室町時代	検出面の基盤に小礫混入、柱痕不明瞭

第１表　掘立柱建物一覧表

している。出土した瓦器片からＳＫ１に後攻する、鎌倉時代初頭の所産である。

ＳＫ３　ｅ列46グリッドで検出した。長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.55mである。埋土が基盤層や自然堆積層とは異なる状況であることから短期間の埋没とみられる。12世紀中葉頃の瓦器と土師器甕（２）が出土している。

【溝】

ＳＤ４　ｆ列45～ｅ列47グリッドで検出した。幅1.2m、長さ4.5mで北流する。一部が村道と重複する。埋土は砂質系の灰褐色土である。東側の肩部分に川原石が２段重ねになり、張りついた状態で検出した。遺物は瓦器と陶器の小片が多量に含まれていたが、江戸時代初頭の遺構であるとみられる。

ＳＤ６　ｅ～ｆ列36グリッドで検出した。幅0.4m、長さ3.0m、深さ0.2mである。ＳＤ５に先行する。上面で陶器の混入もみられたが、瓦器椀と鍋が出土している。

ＳＤ５　ｃ～ｆ列36グリッドで検出した。幅1.4m、長さ13m、深さ0.28mで、東方に流れる。埋土が不明瞭なため、底部での検出になった。埋土は灰白細砂の他とは特異な遺構である。陶器椀（４）等が出土している。

ＳＤ７　ｅ列33グリッドで検出した。幅0.3m、長さ4.0m、深さ0.15mである。瓦器底部小片が出土している。

Ⅳ　遺　　物

調査区全体から出土した遺物はコンテナバットで40箱である。主流は中世から近世初頭の遺物となるが、Ｃ地区の包含層中から総数約200 点の縄文土器・石器等が出土している。これも本遺跡の特徴である。

以下、遺構別に主な遺物を概略、記述する。

鎌倉～江戸時代の遺物

１　ＳＫ１出土遺物

瓦器　椀　１は、大和型に類似する伊賀型である。口縁上端部に沈線が施される。口縁部はやや外反するが、体部にかけての屈曲度は弱くなる。内面のヘラミガキは底部ほど省略されている。Ⅲ－Ｂ期に属し、12世紀後半のものと考えられる。[①]

２　ＳＫ３出土遺物

土師器　鍋　２は口縁残片である。村内に広く分布する器形である。口縁部は肥厚し、端部は内側に折り返されて面をもつ。

３　ＳＤ５出土遺物

土師器　皿　３の口縁部はナデられて端部は丸みを帯びる。体部から底部の屈曲はやや弱い。

陶器　椀　４は内外面共にロクロナデが施される。高台部はケズリ出し調整によって成形されている。内面に釉薬が施されている。

陶器　椀　５の高台は貼付け後ナデ調整が施される。端部はやや丸みを帯び、外方向に開く。底部内面には放射状の絵付けが施されている。

陶器　擂鉢　６・７は体部器形の大きさ、スリメの単位で時期的な差異が認められる。６は藤澤氏編年の大窯Ⅰ期後半、７はそれとは後攻するⅡ期に相当する。[②]

４　ＳＤ10出土遺物

銭貨（寛永通寶）８は混入品である。推定径2.4cmで、鋳造初年は寛永13（1636）年である。欠損が激しい。他に包含層中から１点出土している。

５　ＳＤ11出土遺物

陶器　捏鉢　９は器壁は厚く、大型品である。高台は貼り付け後ナデられ、端部は下方に突出して安定している。

６　ＳＫ31出土遺物

釘　10は角釘である。敲打部から下端部にかけて銹化が激しい。が大型品である。

７　ＳＫ36出土遺物

陶器　菊皿　11は内面底部にトチンの痕跡がある。焼成直後に廃棄されたものと考えられる。登窯Ⅱ期に相当する。[③]

８　ＳＫ38出土遺物

土錘　12は土師質の遺物である。外形は円筒状である。内外面共にナデられ、精製されている。他に包含層出土の瓦質の遺物が２点残存する。外面形は円

錐形を呈する。

9　ＳＫ42出土遺物

陶器　小皿　13のロクロナデは内面底部から口縁部まで及ぶ。ケズリ出しによる高台は僅かに下方に突出する。

土師器　鍋　14・15は南伊勢系土師器である。器壁は薄く、外形は頸部から口縁部にかけて「Ｓ」字状に屈曲する。体部外面にナデられた後の指オサエ痕が観察される。外全面に煤が付着する。口縁端部は上方にツマミ上げられる。共に伊藤氏編年の第３段階ｂ期に相当する。[4]

陶器　擂鉢　16のスリメの単位は幅広く、体部1/3以下に施されている。口縁端部はロクロナデされ、上方にやや尖り気味である。17の内面はロクロナデ後に鉄釉が施されている。焼成時の藁の炭化物が観察される。先述の６と同様、藤澤氏編年の大窯Ⅰ期に相当する。18は器壁も薄く、口縁端部は内傾し、丸みを帯びる。大窯Ⅲ期の前半に相当する。19は残存率の高かった品で、スリメの単位は２㎝／５本で、身込み部まで及んでいる。底部外面にロクロ台の盤脚のアタリ痕が観察される。

銭貨（咸平元寶）　20は宋銭で、初鋳年代は咸平元（998）年である。[5]

弾丸　21は鉛玉である。直径は0.8㎝である。白く銹化している。

10　ＳＫ50出土遺物

土師器　鍋　22は南伊勢型鍋である。器壁は薄く、口縁部はほぼ水平にヨコナデされる。端部はやや外方に丸められている。伊藤氏編年の第４段階に相当する。[6]

陶器　擂鉢　23のスリメは底部にまで施されている。内外面共に施釉されている。大窯Ⅳ期に相当する。

火ばさみ　24は軸の長細い品である。支点が比較的短い。[7]

釘　25は断面方形である。欠損、銹化が激しい品である。10に比較すると大型品である。

11　ＳＫ51出土遺物

瓦器　皿　26は偏平で、底部外面はナデ調整後指オサエが施される。底部内面にはジグザクを描く暗文が観察される。山田氏編年のⅢ段階１型式に相当し12世紀末と考えられる。

陶器　擂鉢　27・28共に同時期の遺物である。共に口縁端部は折り返され、丸みを帯びる。23のスリメは上端部から施されている。24の外面には鉄釉も施されている。大窯Ⅱ期に相当する。

12　pit 出土遺物

弾丸（鉛玉）　29はＳＫ42出土遺物と共に同じ規格の遺物である。直径0.8㎝である。

13　包含層出土遺物

縄文時代の遺物

石器　（30～50）は主な製品と剥片である。全遺物の構成は石材別に、サヌカイトが８割、チャートが２割である。器種別には有茎尖頭器（30）が１点、石匙（31～32）２点、削器（33～35）３点、石鏃（36～47）12点、石錐（48）１点という構成である。その殆どをＣ地区の包含層中で検出した。剥片はチップ状のものまで大小様々な遺物が観察された。以下、詳細は観察表に記述した。

縄文土器　51～60は有文で、おそらく深鉢形土器の口縁部小片である。51はやや外反する口縁で、口頸部で内側に屈曲する。それ以下は無文部である。横走する凹線４条は巻貝による施文である。52は53に比較すると、口縁から胴部へは緩くカーブするタイプである。幅狭である。外面も磨滅しておらず、凹線も明瞭に観察される。

54は凹線というよりむしろ沈線、55は幅広である。共に施文後ナデられ、再調整されている。56の凹線は胴下部に施されている。劣化が激しい。

57の内外面には不揃いながら横走する条痕が施されている。胎土に７㎜大の長石を含んでいる。

58は縄目を施文後、凹線が施されている。他品より後出するものである。59は磨滅は殆どなく、外面の施文もよく観察できる。ほぼ横走する縄目が施されている。

59は58と比較するとやや太めの条痕が施される。下端部に補修孔が１孔穿たれている。

60は唯一、押型文が施される。[8][9]

中世の遺物

土師器　羽釜　61は口縁端部が欠損している。推定口径は20㎝を越える大型品である。

瓦器　椀　64～66は遺存状態が良好な資料である。共通して内面には丁寧なミガキが施される。

瓦器　皿　67～71は器高が２cmに満たない偏平な品である。同時期の遺物である。口縁が外反し、端部はヨコナデされて横行し、丸みを帯びる。内底部にジグザグ状のヘラミガキが共通して施されている。

土師器　皿　72～75は口径が10cm程の小皿である。72・73は口縁が「て」字状を呈する。時期的には12世紀後葉の所産である。[10]

【註】

①山田猛「Ⅱ伊賀の瓦器」『伊賀の瓦器に関する若干の考察』中近世土器の基礎研究Ⅱ　1986
②藤澤良祐「瀬戸大窯の変遷」『瀬戸市史』陶磁史篇四・瀬戸大窯の時代　瀬戸市史編纂委員会　1993
③本堂弘之ほか「Ｖ結語」『六大Ｂ遺跡（Ａ地区）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999
④伊藤裕偉「中世南伊勢系土師器に関する一試論」『Mie history』Vol.1　三重歴史文化研究会　1990
⑤ニューサイエンス社、考古学ライブラリー45『出土渡来銭』－中世－　1986
⑥伊藤裕偉「Ｖ調査のまとめと検討」『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993
⑦美杉ふるさと資料館編『鉄砲伝来と砲術展』　1994.4
⑧皇學館大学考古学研究会『美杉村の遺跡』　1995
⑨森川幸雄『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1995
⑩森川常厚「Ⅳ遺物、Ｖ結語」『森脇遺跡（第３次）発掘調査報告』　1991

Ⅴ　調査の成果

１　包含層出土の縄文遺物について

Ｃ地区の包含層中から出土した土器を観察すると後期中葉の凹線文土器が中心である。皇學館大学の分布調査結果とも考え合わせると頷ける結果を示している。[1]しかし、条痕文や押型文土器も含まれていることを考えると早期の遺構も付近に包含されていることも予想される。

石器について以下、まとめておきたい。

包含層出土の石器、剥片のうち８割がサヌカイト製で、ほかはチャート製であった。石鏃については土器との相関関係はあまりなく、全て中期～後期に普遍的に存在する小型無茎の三角鏃であった。剥片については後世の剥離を残すものが多かった。その部分を除いては、３面構成のもので①素材面を残す一面、②一次加工に止まる一面、③二次加工も施す一面とが存在する。

２　掘立柱建物と土坑群について

鎌倉～室町時代の建物を６棟確認したことで、当時の集落の一端が明らかとなった。村内での中世の建物跡の調査例は、奥津所在の西ノ手遺跡が挙げられる。検出された２×４間、３×５間の東西棟はいずれも13世紀までの遺構である。これらには北側に３・４基の土坑が伴うと報告されている。[2]また、上多気所在の大蓮寺遺跡では本例のＳＫ17～ＳＫ21と同様、建物南向きに配置された土坑が検出されている。[3④⑤]本例と同様、使用目的については判明していない。

当遺跡を含めて土坑は①殆ど無遺物であること②焼土、炭化物は微量であること③埋土も柔らかい（単層）暗褐色土で、自然堆積層と明らかに相違することから用途については現段階では有機物等の備蓄用か、あるいは廃棄用と考えておきたい。

３　鋳造関連の遺構について（地元聞き取り）

Ｂ地区東側で確認した土坑群は計26基であった。焼土、炭化物、焼石を伴う遺構もあった。これらから出土した金属製品は弾丸・火ばさみ・鉄釘等が26点であった。検出当初より鋳造遺構の可能性も考慮

に入れ、郷土資料を調査していた。それと相まって地元住民から「鋳物鍛冶」についての情報を得る機会があった。その情報をもとに遺構との関連性を考えた場合、B地区～A地区そのものが鉄砲や刀剣類、釘の製造または廃棄場所であった可能性が高い。ただ包含層からの出土遺物に陶磁器等も多く含まれることから存続期間が近世末までに及ぶ可能性がある。

以下、地元、南地区在住の井上氏からの聞き取りを要約する。

調査区近くの民家に「かじや」という屋号が２軒あり、うち①自宅の蔵の改修の際、フイゴが大量に出てきた。またその時蔵に鉄砲、刀が収められていた。②付近の村道拡張の際、舗装工とともに鉄滓が出土した。③裏山に金糞、鉄滓出土地点がある。④B地区出土の礫石にはかごたての石（大洞石）や山石、三峰山産の川原石以上の三種類があり、これらが竈をつくる素材であったこと。との報告をしておられる。

（中川　　明）

【註】

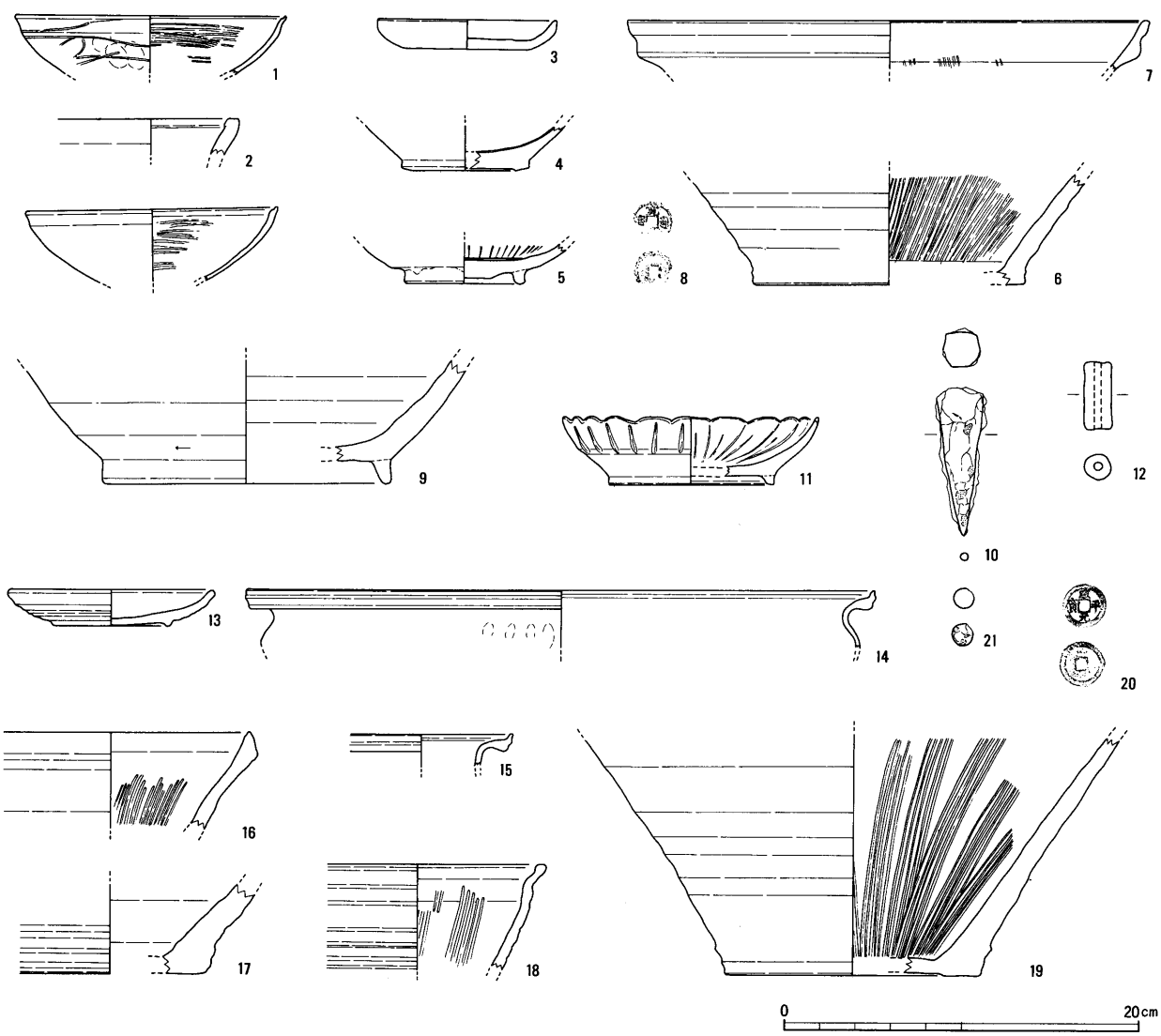
①「135南遺跡」・「三重県下の押型文土器について」『美杉村の遺跡』皇學館大学考古学研究会　1995

②平成10年に美杉村教育委員会が調査。報告によると建物に伴う土坑は平面形がほぼ円形で垂直に掘削されており、無遺物が特徴であるとのこと。

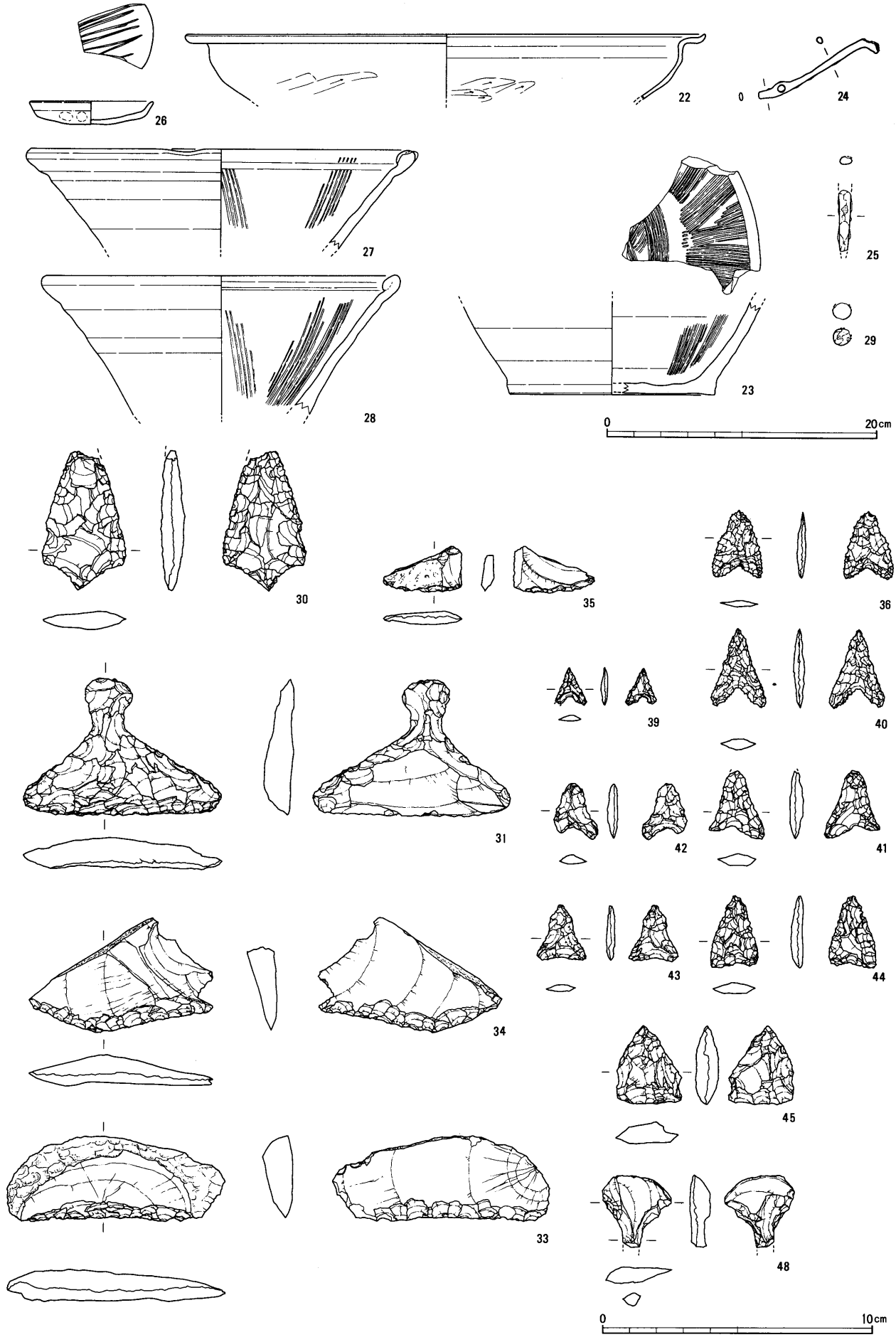
③伊藤裕偉「大蓮寺跡関連遺跡の調査」『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993

④伊藤裕偉「伝本願寺跡の遺構」『多気遺跡群発掘調査報告Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　1996

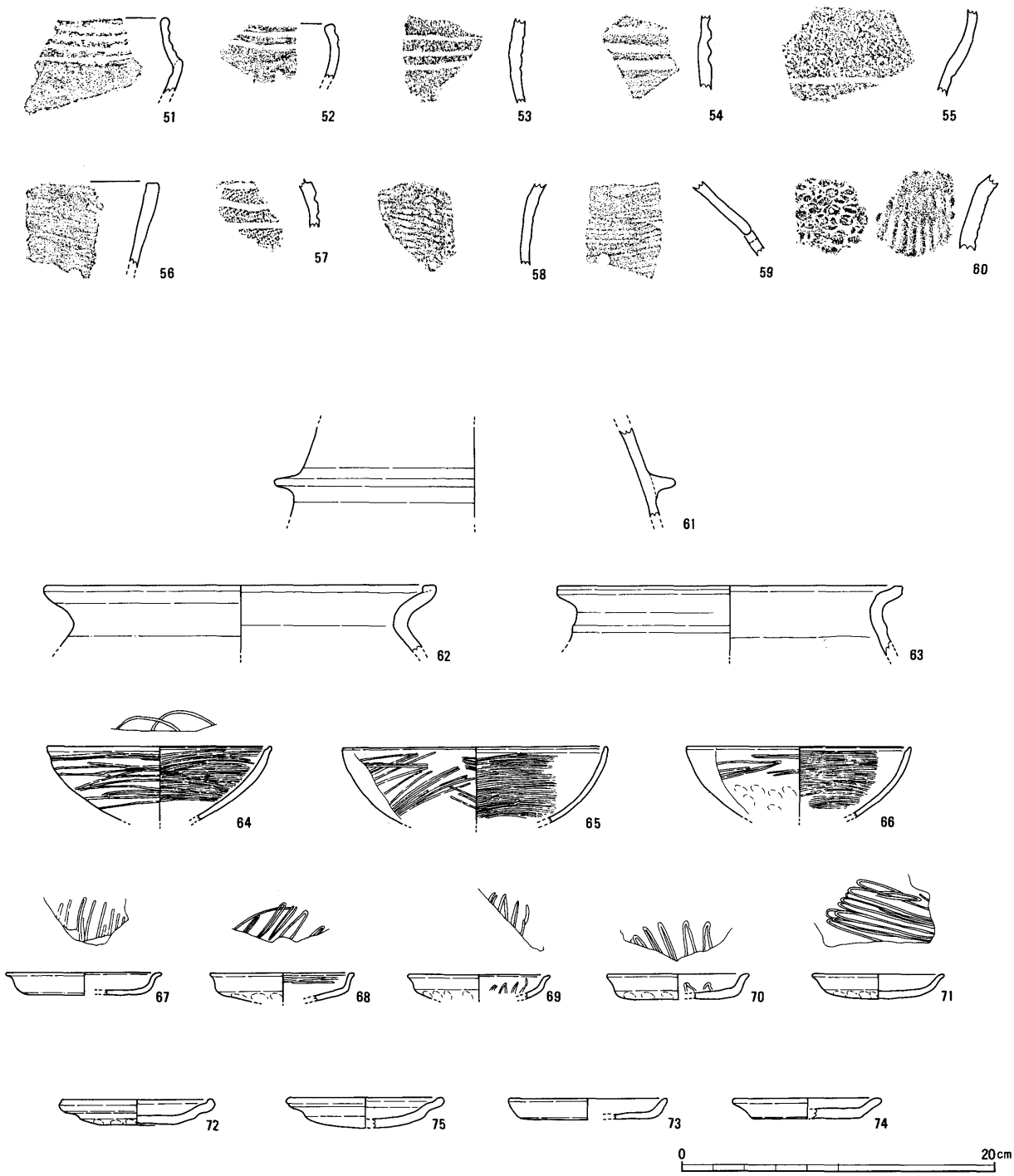
⑤土師器皿が出土した土坑ＳＫ２は14世紀前半で、総柱建物ＳＢ７に先行する内容の報告がされているので建物に伴う類例ではない。



第９図　出土遺物実測図１（１：４）



第10図　出土遺物実測図２（１：４）



第11図　出土遺物実測図３（１：４）

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径 底径	器高 重g	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	001-06	瓦器 椀	e47 SK1	15.0	——	内：指オサエ、口縁 ヨコナデ 外：指オサエ、ミガキ	密	並	灰色	残僅か	ミガキは口縁部
2	001-08	土師器 鍋	e46 SK3	——	——	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	口縁部細片	
3	003-03	土師器 皿	C36 SD5	10.0	1.6	内：ナデ 外：指オサエ、ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色	1/4残	口縁部に黒変
4	001-05	陶器 椀	e36 SD5	7.0	——	内：ロクロナデ(施釉) 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	やや粗含 ～2mm砂	並	灰白色	1/4残	削り出し高台
5	001-04	陶器 椀	C36 SD5	6.5	——	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ(施釉)	やや密	並	にぶい黄橙色	1/2残	貼り付け高台
6	002-03	陶器 擂鉢	e36 SD5 No.2	29.0	——	内：ロクロナデ、スリメ 外：ロクロナデ	やや密含 ～6mm石	並	灰褐色	口1/6残	
7	003-02	陶器 擂鉢	e36 SD5 No.1	15.0	——	内：ロクロナデ、スリメ 外：ロクロナデ、ナデ	やや粗含 ～2mm砂	並	灰褐色	底1/6残	
8	002-05	寛永通寶	e26 SD10	2.4	2.3g	内孔：方形0.7mm	——	——	——	2/3残	
9	002-01	陶器 鉢	e25 SD11	16.0	——	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	やや粗含 ～3mm砂	並	灰白	1/7残	底部に重ね焼き痕
10	013-04	鉄釘	f17 SK31	9.3	11.9	敲打部は欠損	——	——	——	1/2残	
11	001-02	陶器 菊皿	f15 SK36	14.0 9.0	3.8	内：ナデ 外：ナデ、ロクロナデ(施釉)	やや密	並	浅黄橙色	口1/6 底1/3	底部にトチン痕
12	006-06	土師質土錘	g15 SK38	1.5 3.7	9.74 g	内：ナデ 外：ナデ	やや密	良	にぶい橙色	殆ど完存	
13	001-01	陶器 小皿	g13 SK42 No.1	11.5 6.5	2.05	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ、底トチン、痕	やや密含 ～1.5mm	並	褐灰色	口1/3 底1/2	
14	003-04	土師器 鍋	g13 SK42	35.0	——	内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	やや密含 ～1.5mm	並	にぶい黄橙色	残存部僅か	
15	004-05	土師器 鍋	g13 SK42	——	——	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗含 ～mm砂含	やや粗	浅黄橙色	残存部僅か	内外面に媒付着
16	005-03	陶器 擂鉢	g13 SK42	——	——	内：ロクロナデ、スリメ 外：ロクロナデ	粗含 ～2mm砂	良	橙色	口1/8残	体部以下にスリメ調整
17	006-03	陶器 鉢	g14 SK42	——	——	内：ロクロナデ(鉄釉) 外：ロクロナデ(鉄釉)	粗含 ～4mm石	良	灰褐色	残存部僅か	焼成時の炭化した藁付着
18	006-02	陶器 擂鉢	g13 SK42	——	——	内：ロクロナデ(施釉) 外：ロクロナデ(施釉)	密	良	赤灰色	1/4残	
19	003-01	陶器 擂鉢	g13 SK42	14.0	——	内：ロクロナデ、スリメ 外：ロクロナデ	やや粗含 ～6mm石	並	にぶい橙色	1/5残	
20	002-04	咸平元寶	g14 SK42	2.4	2.4g	内孔：方形0.7mm	——	——	——	ほぼ完存	初鋳は998年
21	013-02	弾丸	g13 SK42	1.1	9.9g	——————	鉛製	——	——	ほぼ完存	
22	004-02	土師器 鍋	g12 SK50	38.0	——	内：ヨコナデ、ケズリ 外：ヨコナデ、ケズリ	やや密	並	浅黄橙色	口1/8残	外面に媒付着
23	005-02	陶器 擂鉢	g12 SK50	15.0	——	内：ロクロナデ、スリメ(施釉) 外：ロクロナデ(施釉)	粗含 ～2mm砂	良	にぶい橙色	底1/7残	底部までスリメが及ぶ
24	013-01	火ばさみ	g12 SK50	9.3	11g	直線的な加工	鉄製	——	——	——	先端のみ欠損
25	013-05	鉄釘	g12 SK50	4.5	8.0g		鉄製	——	——	——	
26	006-05	瓦器 皿	h11 SK51	9.0	1.7	内：ヨコナデ、ナデ(暗文) 外：ヨコナデ、ナデ、指オサエ	密	良	灰色	口1/4残	
27	002-02	陶器 擂鉢	g11 SK51	28.5	——	内：ロクロナデ、スリメ 外：ロクロナデ	やや密含 ～5mm砂	並	赤灰色	口1/6残	
28	004-01	陶器 擂鉢	h11 SK51	26.0	——	内：ロクロナデ、スリメ 外：ロクロナデ	やや密含 ～2mm砂	良	褐灰色	口1/6残	
29	013-03	弾丸	f16 P2	1.2	9.6g	——	鉛製	——	——	ほぼ完存	

第2表　出土遺物観察表1

No.	登録No.	器種	材質	出土位置グリッド	形態の特徴	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
30	014-01	有茎尖頭器	チャート	e 45 包含層No. 1	先端部折損、左右側縁部に微細な剥離を残す。	5.16	3.06	0.86	11.8	先端部折損
31	014-02	石匙	サヌカイト	c 44 包含層	幅広で、表裏面に明確な剥離を施す。先端部は丸い。	5.10	7.24	1.01	25.0	完存
32	014-03	石匙＊	サヌカイト	e 27 P 1直上	偏平で、つまみ部に自然面を残す。先端部は丸い。	3.05	5.10	0.67	9.5	完存
33	014-04	削器	サヌカイト	c 32 包含層	刃部に加工を施す。打面に自然面を残す。	3.20	8.03	1.19	31.0	谷地形に流入
34	014-05	削器	サヌカイト	e 30 排水溝	刃部が凸になる。上部に礫表を残す。製作時のワレを残す。	4.30	6.75	1.17	20.4	
35	014-06	削器	サヌカイト	g 4 包含層	小型品。一側縁に刃部を作る。表面に一次面を残す。	1.73	2.90	0.46	2.1	
36	014-07	凹基無茎石鏃	サヌカイト	d 43 包含層No. 1	細身で先端部は丸い。側縁部は鋸歯状。先端部は丸い。	2.45	1.85	0.30	1.1	
37	014-08	凹基無茎石鏃＊	サヌカイト	e 39 包含層	小型品。先端部丸い。脚部は尖鋭。側縁部は湾曲。	1.45	1.45	0.34	0.5	
38	014-09	凹基無茎石鏃＊	サヌカイト	e 36 包含層	細身で側縁部が内湾。脚部は方形。抉りは円弧状で浅い。	1.90	1.35	0.25	0.5	
39	014-10	凹基無茎石鏃	サヌカイト	b 26 包含層	先端は尖鋭。側縁は直線的。脚端部は不揃い。	1.36	1.20	0.25	0.2	
40	014-11	凹基無茎石鏃	サヌカイト	c 39 包含層	先端部は尖鋭。抉りは深い。素材面を残す。	2.90	2.05	0.40	1.3	
41	014-12	凹基無茎石鏃	チャート	f 29 東壁No. 6	脚部が不揃い。抉りは浅い。剥離痕が大きい。	2.51	2.05	0.47	1.6	
42	014-13	凹基無茎石鏃	サヌカイト	e 47 包含層	側縁部が内彎。脚部が不揃い。裏面の剥離は粗い。使用時の折あり。	2.03	1.64	0.38	0.9	
43	014-14	凹基無茎石鏃	サヌカイト	e 26 SD 9直上	側縁部が屈曲。抉りは水平に近い。脚部は開く。	2.02	1.78	0.30	0.8	包含層出土か
44	014-15	凹基無茎石鏃	チャート	e 25 包含層	二等辺三角形で尖鋭。抉りは浅い。裏面に周縁加工を施す。	2.66	1.73	0.45	1.9	
45	014-16	凹基無茎石鏃	サヌカイト	d 43 包含層No. 2	甲高の正三角形。右側縁部に折あり。両面に素材面を残す。	2.89	2.39	0.78	5.2	
46	014-17	凹基無茎石鏃＊	サヌカイト	e 38 包含層	脚部が僅かに膨らむ。先端部折損。	1.30	1.25	0.25	0.3	
47	014-18	凹基無茎石鏃＊	サヌカイト	d 37 包含層	先端から脚部にかけて折損。磨滅が激しい。脚部が膨らむ。	2.80	1.30	0.25	0.9	
48	014-19	石錐	サヌカイト	c 33 包含層	ツマミ部未調整。先端部折損。主剥離面残る。錐部のみ調整。	2.68	2.59	0.73	3.3	谷地形に流入
49	014-20	剥片RF＊	サヌカイト	b 27 包含層	左右側縁部に二次剥離が残る。表、裏面に一次加工面を残す。	5.87	3.24	3.67	2.2	
50	014-21	剥片RF＊	サヌカイト	e 41 包含層	表面に素材面を残し、裏面は粗めの一次加工を施す。	4.34	5.34	2.45	94.0	

第３表　出土遺物観察表２

＊図面は省略

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	計測値 口径 底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
51	007-03	縄文土器	d 49 包含層	6.0 7.6	7.0	内：ナデ 外：ナデ(凹線４本)	やや粗含 ～３mm砂	並	浅黄色	口縁部 小片	口1/6 残
52	007-04	縄文土器	e 42 包含層	3.7 5.0	——	内：ナデ 外：ナデ(凹線２本)	やや粗含 ～３mm砂	並	にぶい 黄橙色	口縁部 小片	
53	007-05	縄文土器	d 49 黄褐砂質土	5.6 5.2	——	内：ナデ 外：ナデ(凹線３本)	やや粗含 ～３.5砂	並	にぶい 黄色	胴部小 片	
54	007-06	縄文土器	h 3 包含層	5.3 5.0	——	内：ナデ 外：ナデ(凹線３本)	やや粗含 ～３mm砂	並	にぶい 黄褐色	胴部小 片	
55	008-01	縄文土器	f 31 包含層	6.2 8.7	——	内：ナデ 外：ナデ(縄目、凹線１本)	やや粗含 ～３mm砂	並	灰色	胴部小 片	
56	008-02	縄文土器	f 43 包含層	6.0 4.7	——	内：条痕、口唇：ナデ 外：条痕	やや粗含 ～７mm石	並	褐灰色	口縁部 小片	
57	008-03	縄文土器	c 18 Ｐ１直上	4.0 4.3	——	内：ナデ 外：ナデ(縄目、凹線３本)	やや粗含 ～2.5砂	並	灰黄褐 色	胴部小 片	
58	008-04	縄文土器	d 37 包含層	5.7 5.3	——	内：ナデ 外：ナデ(縄目)	やや粗含 ～３mm砂	並	にぶい 黄橙色	胴部小 片	
59	008-05	縄文土器	e 44 包含層	6.2 4.7	——	内：ナデ 外：条痕	やや粗含 ～２mm砂	並	暗灰黄 色	胴部小 片	補修孔１か所
60	008-06	縄文土器	e 32 Ｐ１直上	5.7 5.3	——	内：ナデ 外：押型文	やや粗含 ～３mm砂	並	にぶい 橙色	胴部小 片	内面に炭化物 付着
61	009-01	土師器　羽 釜	c 33 包含層	25.4	——	内：ナデ 外：ナデ、凸帯部貼り付け後ナデ	やや粗含 ～２mm砂	並	にぶい 橙色	口縁部 小片	谷地形に流入
62	009-02	土師器　甕	h 2 包含層	25.0	——	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや粗含 ～２mm砂	並	褐灰色	口1/8 残	
63	009-03	土師器　甕	e 38 包含層	22.0	——	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや粗含 ～２mm砂	並	にぶい 黄橙色	口1/7 残	
64	011-01	瓦器　椀	d 37 包含層	14.2	——	内：ミガキ(横行、螺旋) 外：ミガキ(横行)	密	良	暗灰色	口1/4 残	
65	011-02	瓦器　椀	d 21 包含層	16.8	——	内：ミガキ(横行) 外：ミガキ(横行)	密	良	灰色	口1/7 残	
66	011-03	瓦器　椀	f 32 包含層	14.4	——	内：ミガキ(横行) 外：ミガキ(横行)、指オサエ、ナデ	密	良	灰色	口1/7 残	
67	011-04	瓦器　皿	f 31 東壁	9.8	1.4	内：ヨコナデ、ミガキ(ジグザグ) 外：ヨコナデ、指オサエ後ナデ	密	並	灰白色	口1/6 残	
68	011-05	瓦器　皿	e 44 包含層	9.1	——	内：ヨコナデ、ナデ、ミガキ(ジグザグ) 外：ヨコナデ、指オサエ	密	良	灰色	口1/4 残	
69	011-06	瓦器　皿	f 33 排水溝	9.0	——	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、指オサエ	密	良	灰色	口1/6 残	
70	012-01	瓦器　皿	e 29 排水溝	9.0	1.6	内：ヨコナデ、ミガキ(ジグザグ) 外：ヨコナデ、指オサエ	密	良	灰色	口1/4 残	
71	012-02	瓦器　皿	c 33 包含層	8.6	1.6	内：ヨコナデ、ナデ、ミガキ(ジグザグ) 外：ヨコナデ、オサエ	密	良	暗灰色	口1/4 残	谷地形に流入
72	012-03	土師器　皿	c 32 包含層	9.8	1.6	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、指オサエ	密	並	にぶい 黄橙色	口1/2 残	
73	012-04	土師器　皿	e 31 包含層	10.0	1.4	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、指オサエ	やや密	並	にぶい 橙色	口縁部 小片	
74	012-05	土師器　皿	f 46 排水溝	9.5	1.3	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、指オサエ	やや粗含 ～２mm砂	並	にぶい 橙色	口1/4 残	
75	012-06	土師器　皿	e 38 包含層	10.0	1.9	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや密	並	灰黄褐 色	口1/8 残	

第４表　出土遺物観察表３

No.	遺跡名	所在地	石器			縄文土器	弥生土器	須恵器	土師器	瓦器	山茶椀	天目茶椀	陶器	磁器	備考	遺跡地図番号
			石鏃	剥片	その他											
1	日神A遺跡⑭	太郎生字日神		サ1					2	6						75
2	日神B遺跡⑮	太郎生字日神		サ1チャ2					5	11						76
3	日神城跡⑬	太郎生字日神													※1	77
4	境ヶ瀬A遺跡⑯	太郎生字境ヶ瀬		サ28チャ2					55	73		7	7			78
5	境ヶ瀬B遺跡②	太郎生字境ヶ瀬		サ1		1押型文			3	5						79
6	山之田遺跡④	太郎生字山之田		サ2	スクレーパーサ1				2	9						80
7	太郎生登り遺跡⑦	太郎生字登り	サ1	サ4					26	41	2	1	22	1		81
8	まとば遺跡⑨	太郎生字まとば		サ1				1	24	12		3	3			82
9	太郎生萩原A遺跡⑰	太郎生字萩原		チャ1					5			3	3			83
10	太郎生萩原B遺跡⑱	太郎生字萩原		サ3チャ1					13	8		3	2			84
11	下屋敷A遺跡⑲	太郎生字下屋敷							7	10		3	3			85
12	下屋敷B遺跡⑳	太郎生字下屋敷							4	14		2				86
13	中森城跡⑫	太郎生字城山													※2	87
14	太郎生広垣内遺跡㉑	太郎生字広垣内							2	1						88
15	下切遺跡⑧	太郎生字下切	サ1						9	2		1	3	1		89
16	立道遺跡⑥	太郎生字立道	サ5	サ29	石匙サ1	1？			22	34		7	12	1	青磁1硯1	90
17	南遺跡①	太郎生字南、中尾、北垣内	サ2	サ24チャ2		1			37	52	1	3	27	7		91
18	岩山遺跡⑤	太郎生字岩山		チャ1					数量不明			数量不明	数量不明			92

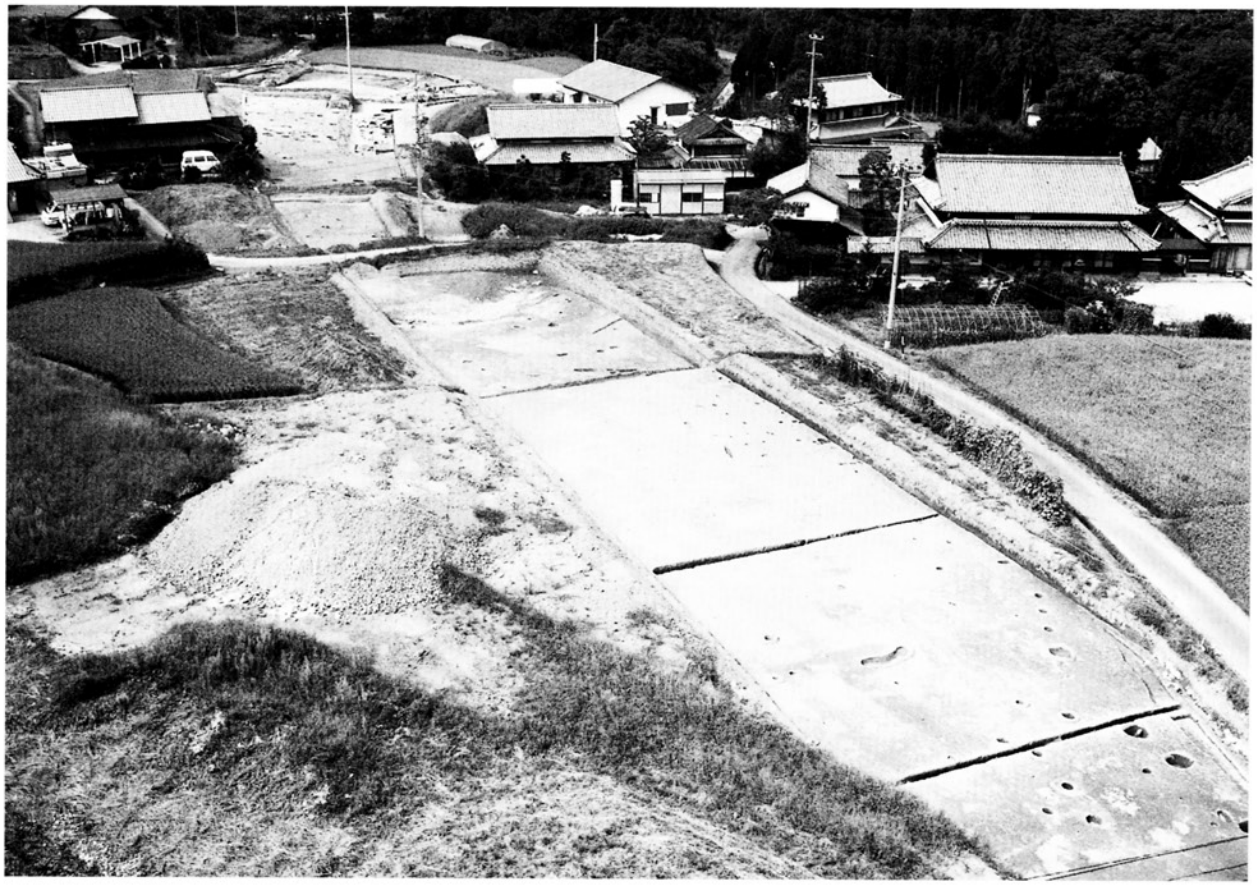
○番号は位置図と対応している。数字は表採点数

※1　伝安藤帯刀氏宅跡

※2　60m×190m、土塁4基、空掘1基、南端に郭、井戸2基。北畠の家臣中森数馬之助の居城という。(『三重の中世城館』より)

第5表　美杉村太郎生地区の遺跡(『美杉村の歴史』参照)

南遺跡より倶留尊山を望む

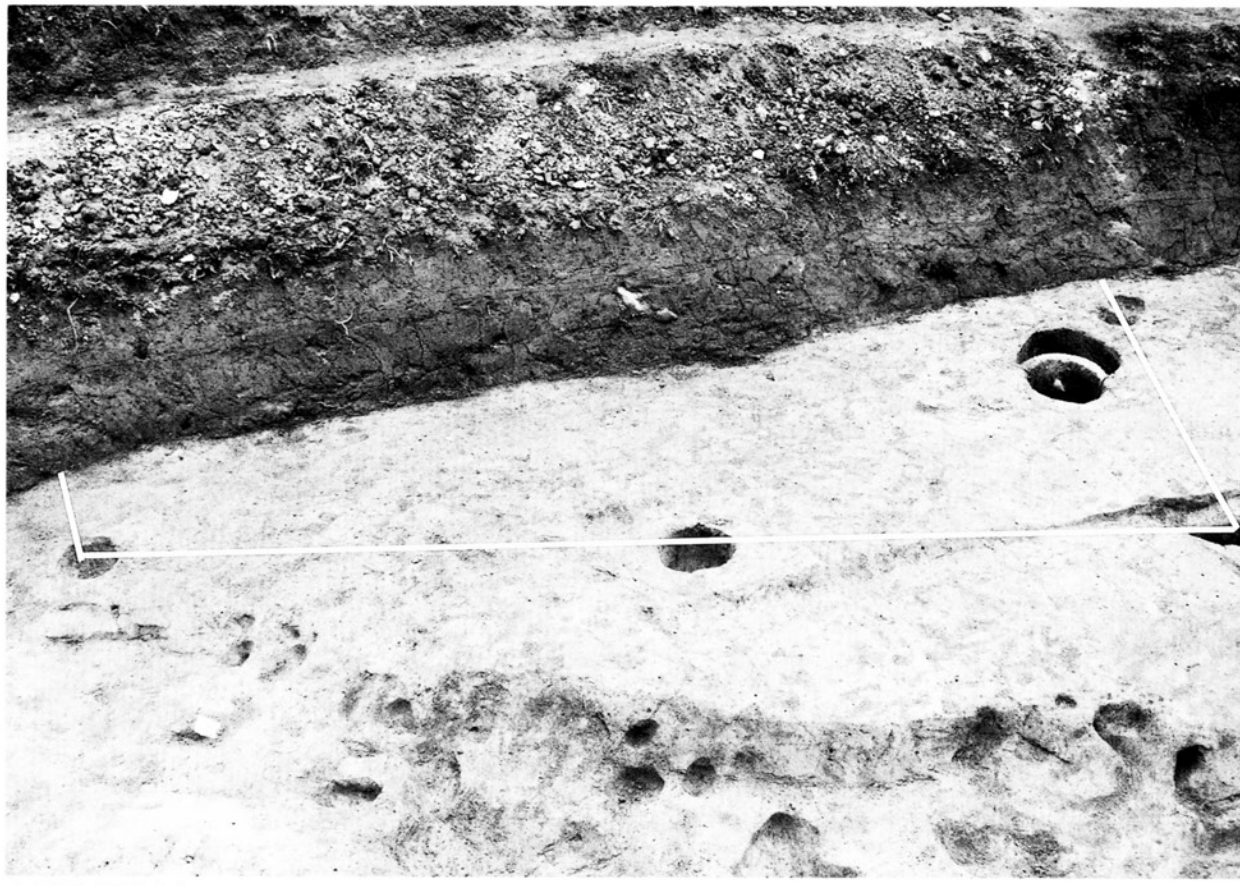


調査区全景（南から）

ＰＬ２

Ｃ地区全景（北から）

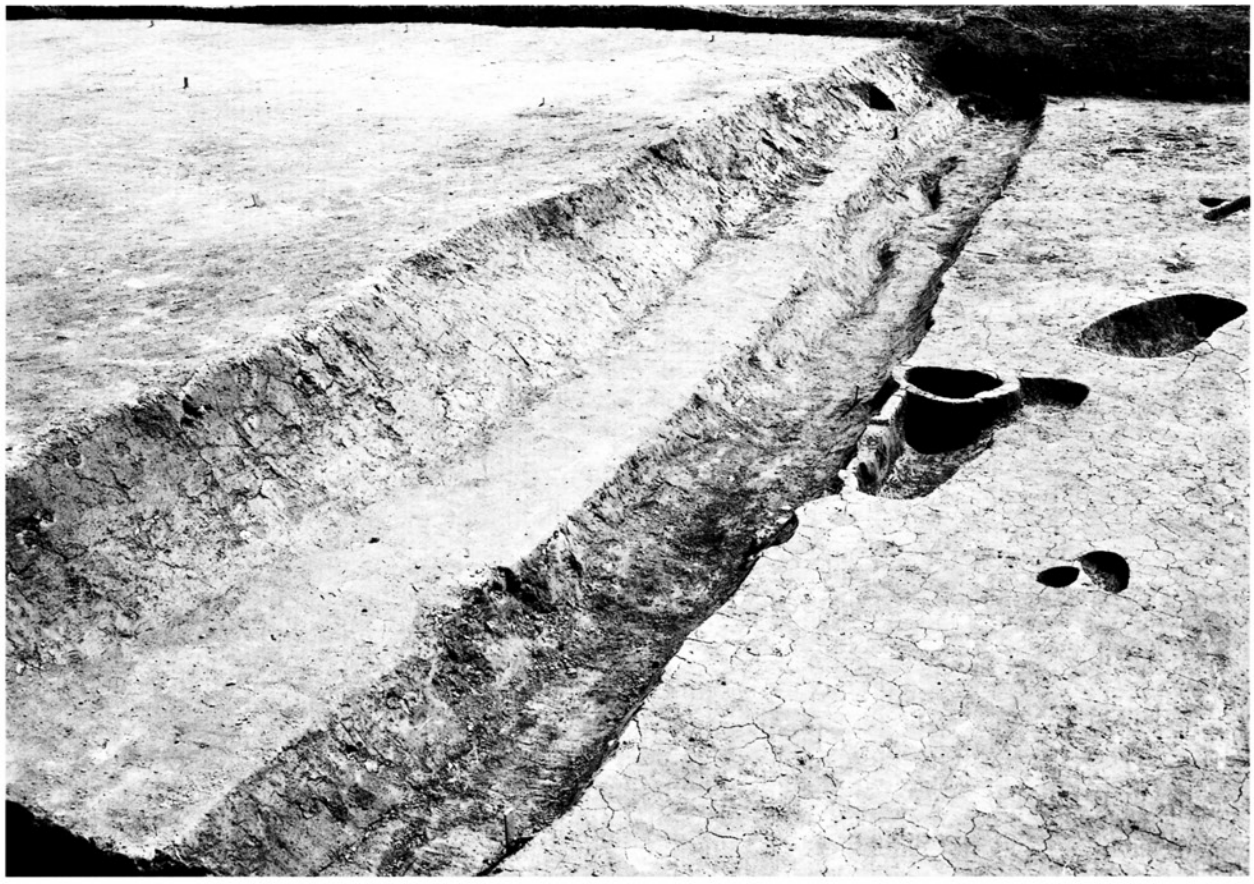
Ｂ地区の建物と土坑群（北から）



ＳＢ63（西から）

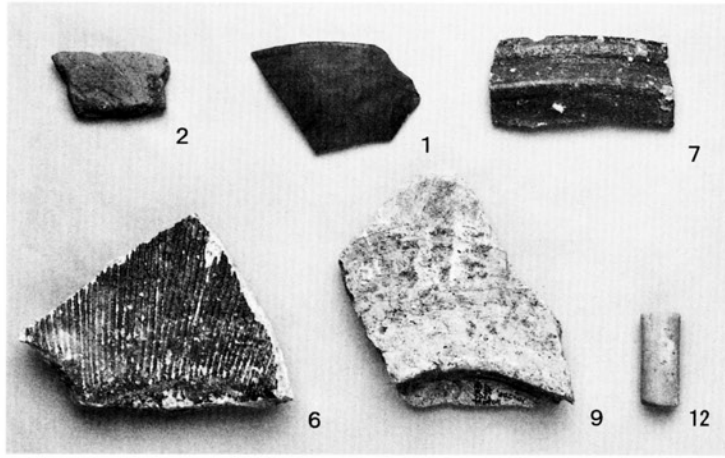
ＳＢ62（西から）

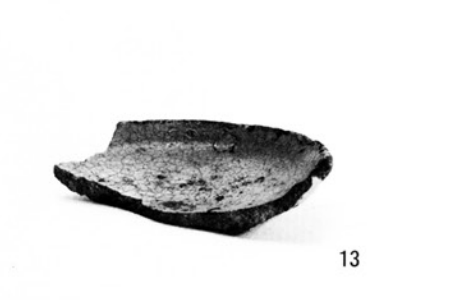
ＰＬ４

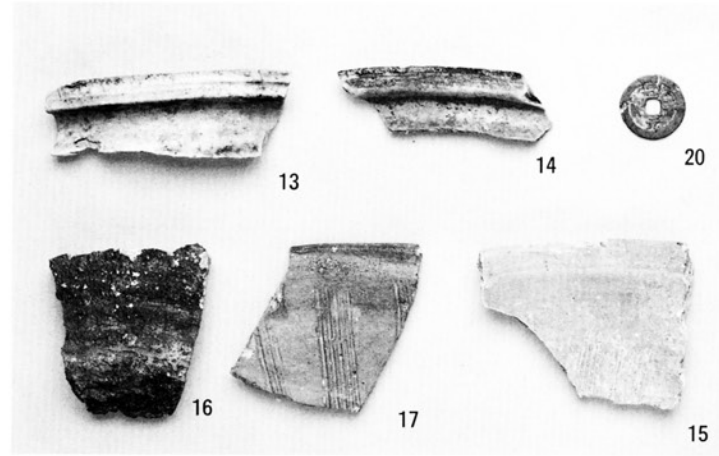


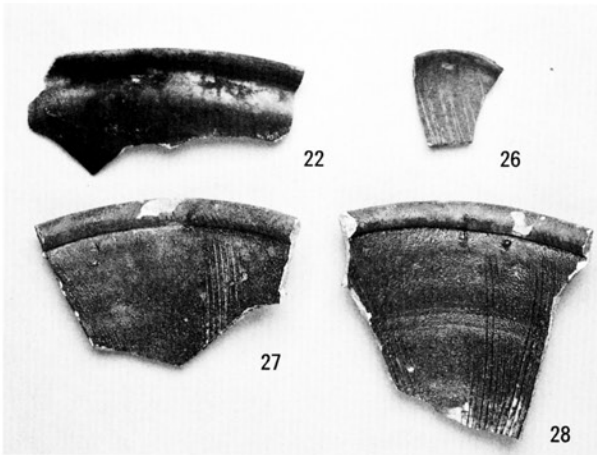
ＳＤ５（東から）

遺物出土状況（東から）

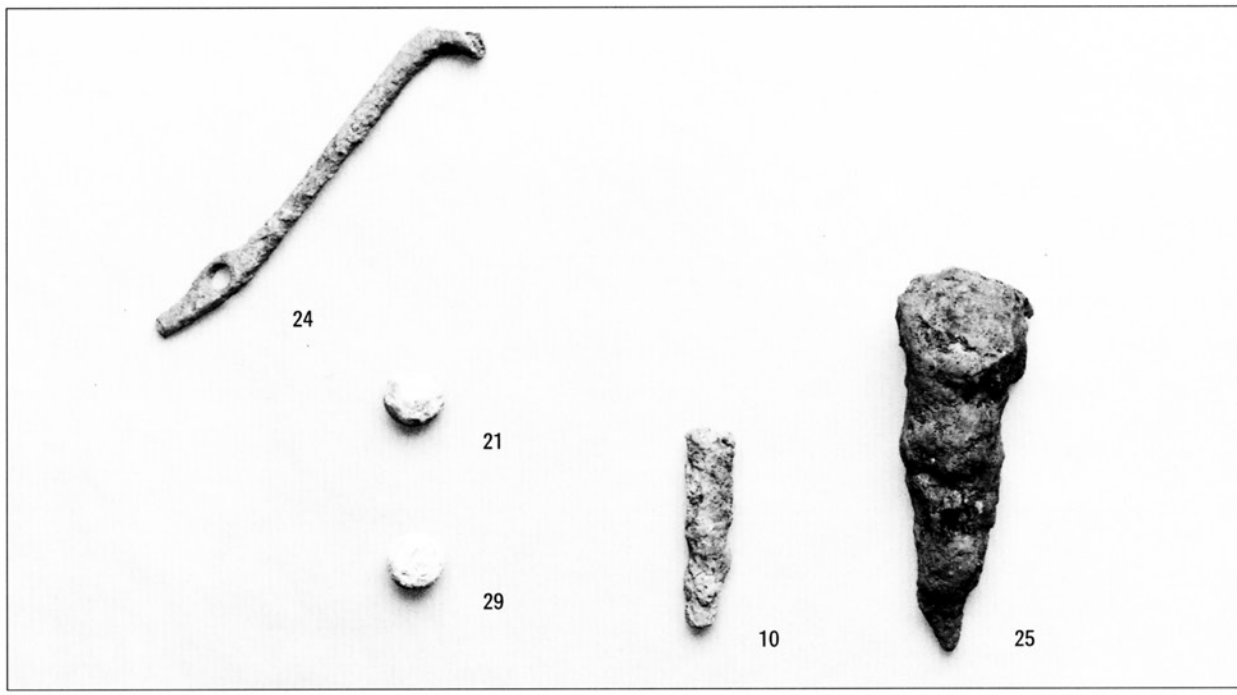


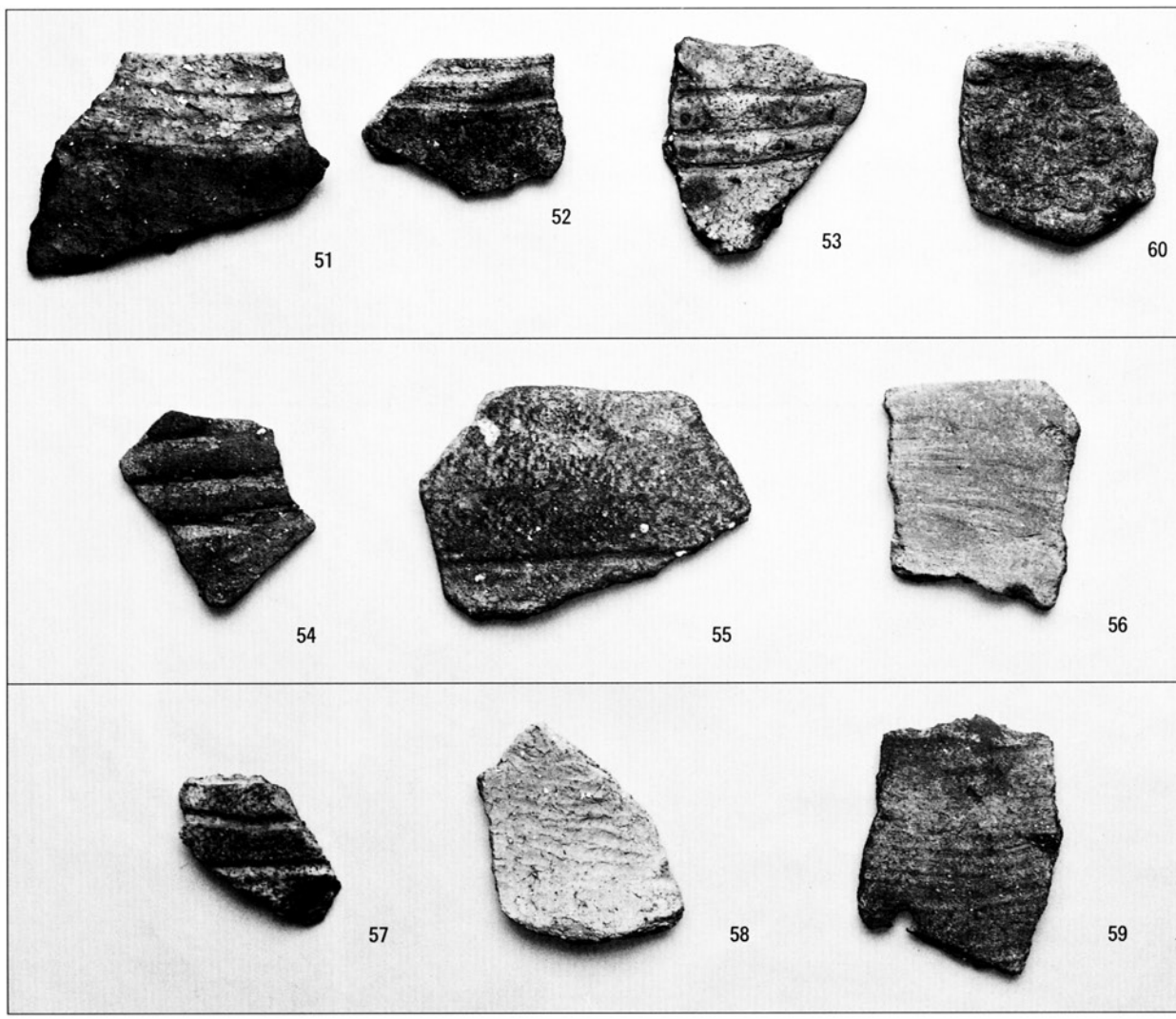




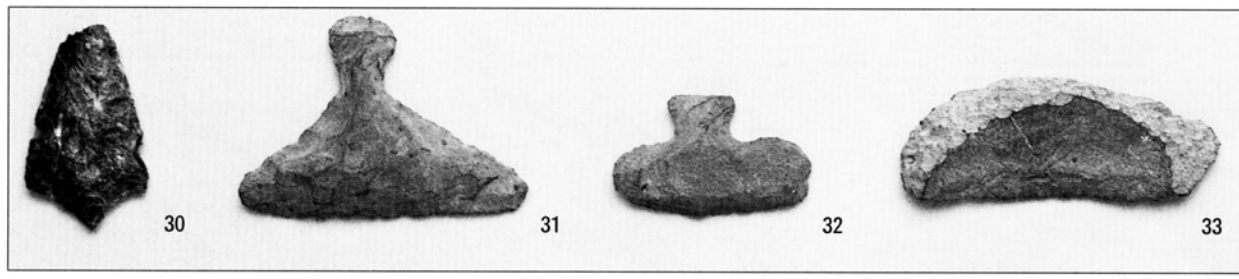


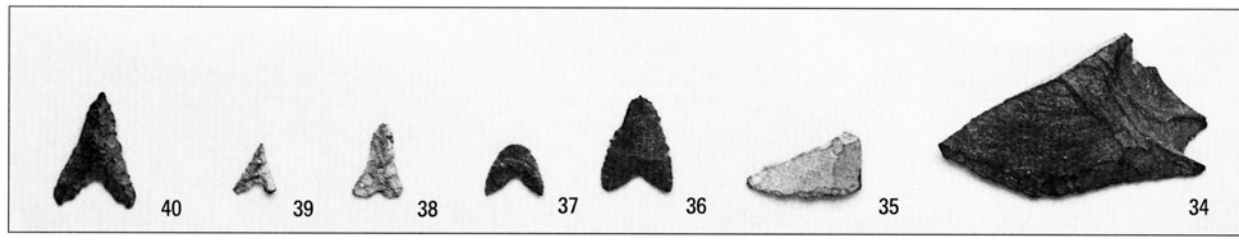
出土遺物１（１：３）（20～23は１：４）

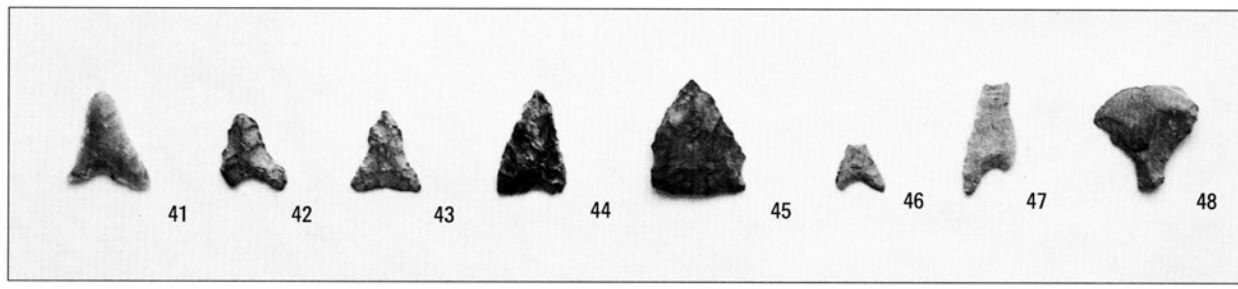


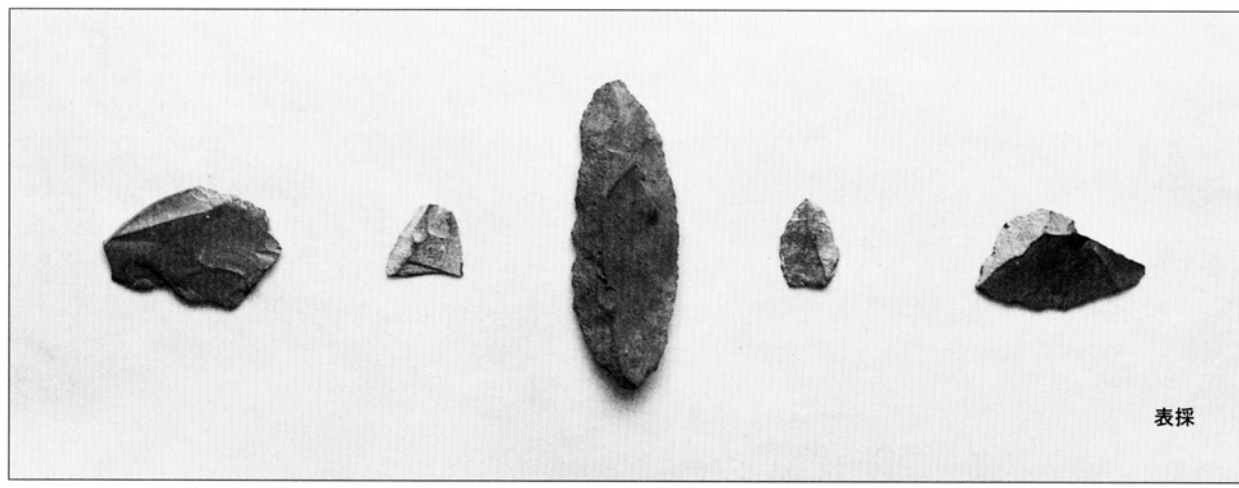


出土遺物２（縮尺不同）

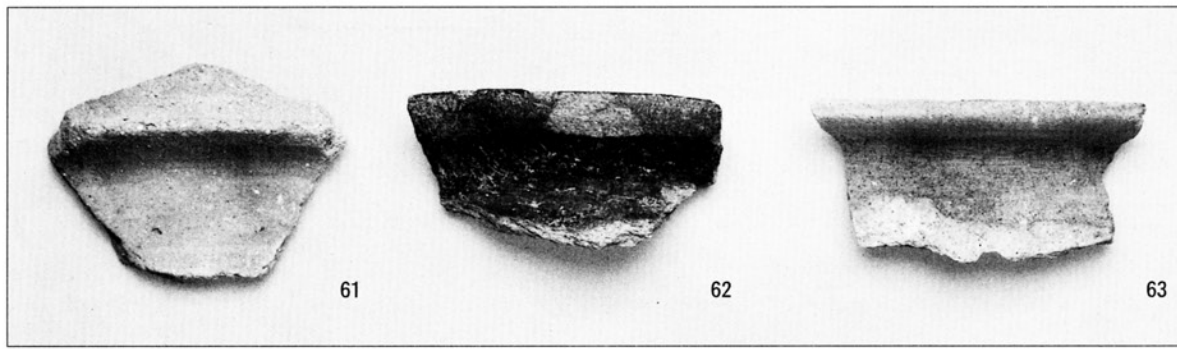


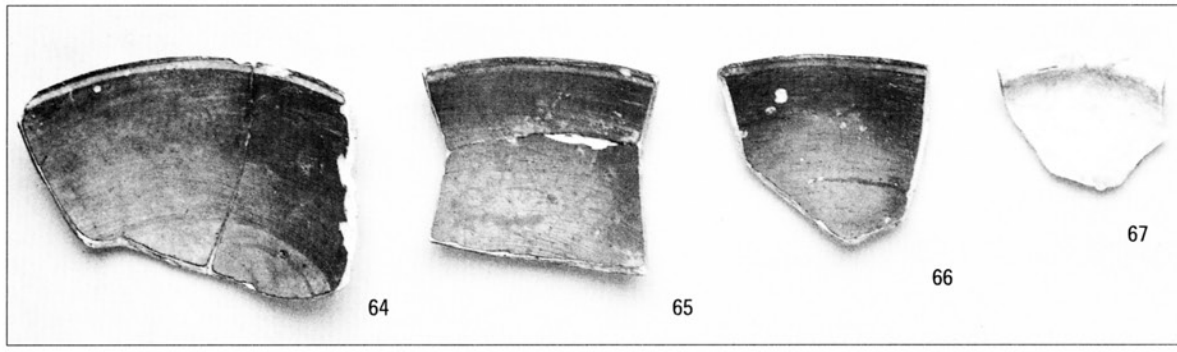


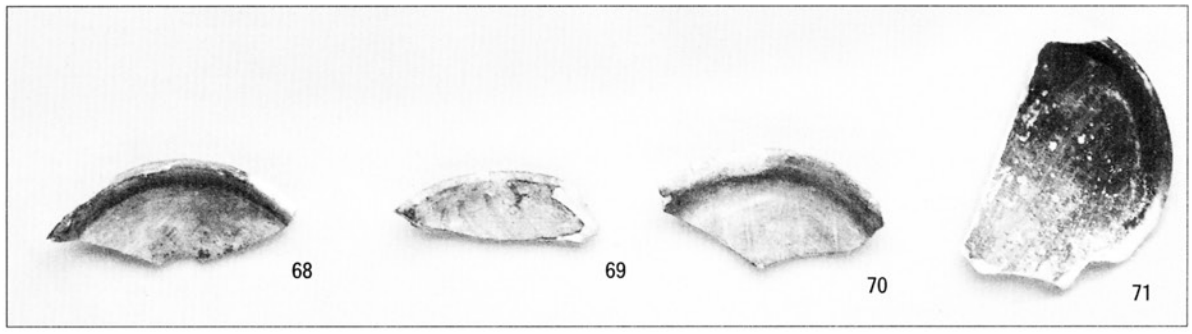


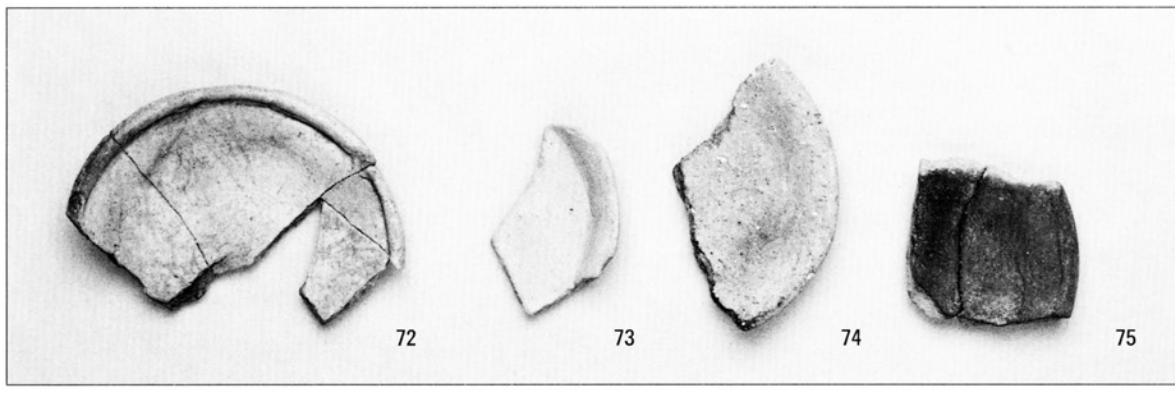


出土遺物３（縮尺不同）









出土遺物４（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	みなみいせきはっくつちょうさほうこく
書名	南遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	211
編著者名	中川　明、宮田勝功
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南遺跡 (みなみいせき)	一志郡 (いちしぐん) 美杉村 (みすぎむら) 太郎生 (たろお) 字南 (あざみなみ) ほか	24401	91	34° 31′ 20″	136° 11′ 40″	1999.5.17 ～ 1999.9.21	2,700	国道368号 上太郎バイパス 国補道路特殊 改良(第1種) 事業に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南遺跡	集落跡	鎌倉時代 ～ 室町時代 江戸時代	土坑　18基 溝　8条 掘立柱建物　5棟 土坑　8基	瓦器椀・皿 常滑焼捏鉢 信楽焼摺鉢 火ばさみ、鉛玉	

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告

南遺跡発掘調査報告

―― 一志郡美杉村太郎生 ――

2000年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社